

中央革命根拠地における毛沢東の革命

—一九三〇年末、毛沢東の「紅軍肅反」・「富田A B団急襲」をめぐる—

小林 一美

第一章 問題の提出

歴史上、新国家を樹立した個人、集団、政党、宗派、民族は皆例外なく、自己の権力樹立を正義に基づくものであり、公明正大な道を歩んだ結果であり、神聖なものであるとする。そして、国家樹立の過程で非命に倒れたものを軍神、英霊、烈士などにし立てて神社に祀り、それとは逆に、敵対したものを、国賊、売国奴、裏切り者、敵の回し者、スパイ等々として断罪し、罪人として歴史の中に葬り去る。とりわけ社会主義政権、ファシズム政権は、歴史を極端に単純化し、総てを二元論、二分論で断罪し、こうした傾向が顕著であった。

しかし、一般的に国家なるものは、いずれも戦士の共同体として出発し、また戦士を慰霊する幻想の共同体として維持されるものであるから、ファシズム国家と社会主義国家だけのことさらにあげつらうのは片手落ちであろう。しかし、この二つの国家形態は人類史上未曾有の「戦争の世紀」であった二〇世紀を特徴づけた国家形態であるから、厳しく分析し批判しなねばならない。

この二つの国家では、とりわけ建国者の英雄化、権力の神聖化が権力の総体をかけて行われた。近代日本は、フアシズムに向けて、天皇の神聖化、靖国神社・明治神宮・護国神社の設立と集団参拝、天皇制の神話化、軍神の賛美などに総力をあげてきた。

日本等の侵略、植民地化に抵抗して誕生した中華人民共和国においては、毛沢東は神の高みに祭られ、党は神聖化され、革命神話は花咲き、被支配階級の貧農は天にまで持ち上げられ、烈士の英雄物語は満面開花した。その一方で、国民党だったもの、毛沢東に敵対したもの、脱党したものや地主、買弁、資本家、自由主義知識人などは、「黒四類」とか「黒五類」とかに分類されて全面的に否定され、徹底的に弾圧された。特に毛沢東時代は、こうした傾向は激烈をきわめた。対外開放以後も、鄧小平など元老によって辞任させられた総書記の胡耀邦、趙紫陽の二人は、なんらの法的根拠もなく死ぬまで自宅に軟禁状態にされた。

毛沢東に反対した総ての人は反革命分子であり、ブルジョア階級であり、誤りを犯したものとされたが、その中でも、土地革命時代に、毛沢東によって「AB団（アンチ・ボルシェヴィキ）分子」として粛清された人、「富田事変」を起こして毛沢東に反対し粛清された人などは、その大部分が、毛沢東が死去するまで名誉回復されることはなかった。今でも完全に名誉回復されたとはいえない。建国後、「AB団粛清」、「富田事変」は、中共最大のタブーとなり、民衆はもちろんのこと黨員さえ口にするをはばかった。毛沢東に臣従した多くの党指導者、紅軍幹部、建国の元勳などが、この大粛清の実行者、あるいは黙認者であったから、なおさらタブーにされたのである。この同志粛清事件は、建国後長い間、革命戦争の神話によってかき消され、闇の中に葬られてきた。

こうした情況に風穴をあけたのは、江西省党委員会の下で中共党史を研究していた一介の下級黨員に過ぎない戴

向青という青年であった。彼が如何なる動機で「AB団肅清、富田事変」の研究を始めたのか、如何なる努力によって、また如何なる経過をたどって、その実態を明らかにしていったのか。次の第二章に翻訳した景玉川の論文が、こうした疑問に答えてくれる。この論文は、中国の権威ある雑誌『百年潮』（二〇〇〇年、第一期、北京）に掲載されたものであり、この問題を内外に公然と紹介した、最初の論文である。

この景玉川論文は、また多くの新しい歴史事実も明らかにした。例えば、富田事変を起こして毛沢東に反対した紅二十軍の將校約七〇〇名から八〇〇名を騙しておびき出し、一九三一年七月のある日の早朝、江西省寧都県の一寒村で一網打尽にして皆殺しにしたのは、彭徳懐と林彪の軍隊であったこと、さらに重要なことは、一九三〇年から三五年にかけての中共党内大肅清において、革命根拠地全体では「AB団」として七万余人、「改組派」として二万余人、「社会民主党」として六二〇〇人が、合計十万人に近い中共黨員、紅軍將兵、ソヴェエト区工作員、革命人民が肅清殺害されたこと、毛沢東死後に、これらの人びとの名誉回復に尽力した有力者は、蕭古將軍、総書記の胡耀邦、後に国家主席になった楊尚昆などであったこと、等々の極めて重要な事実を明らかにしたのである。

この景論文が二〇〇〇年に『百年潮』に発表されるまでには、江西省やその他の省の革命根拠地で肅清された人びとの遺族、知人や地方党関係者の長い真実究明の努力、名誉回復への努力があった。一九八〇年代後半から続々と刊行されるにいたった、『新編中国地方志叢書』に属する『各県志』には、県内で肅清された人々の伝記、名簿、経過などがかなり詳しく記述されている。これによって、処刑された初期の革命家の名誉を回復しようとする動きが、かつてソヴェエト区に属した諸県で、一九八〇年代に大いに高まっていたことを知る。こうした在地の関係者の努力によって、戴向青らの調査研究が支えられ行われたのである。本来は建国の英雄、建国の烈士として称賛さ

れ、称えられ祀られるはずの多くの人びとがA B団の反革命分子、国民党の特務として肅清されてしまったので、その遺族は、屈辱と差別の中で長い間耐え忍んできた。しかし、ついに対外開放、民主化の波に励まされ、名誉回復を求め始めたのである。

戴向青は多くのA B団、富田事変に関する論文を発表したが、その決定版は羅惠蘭との共著『A B団与富田事変始末』（河南人民出版社、一九九四年刊）である。また、江西省の多くの党史研究者が、この関係の研究論文を数多く発表しているが、ここでは省略する。次章で紹介する論文は、A B団肅清、富田事変の真実を究明してきた戴向青らの努力の歴史と、これらの事件を政治的に解決しようとした胡耀邦などの指導者とそれを阻もうとする勢力の動きも明らかにした、注目すべき論文である。こうした論文が北京で発刊されている雑誌『百年潮』に掲載されたこと事態が、真相解明に向けての大きな一歩であることを記しておきたい。

さて、第三省以下においては、紅軍内A B団肅清・富田事変が起きた理由を、紅軍の歴史、毛沢東の主張と行動、それに対する李文林ら江西省党主流派の主張と行動などを中心にして、一九二七年から一九三〇年にかけての時間の経過と共に検討し、事件の真相を明らかにしたい。

第二章 景玉川「富田事変が名誉回復されるまで」の訳文

（原文は「富田事変平反的前前後後」、『百年潮』二〇〇〇年第一期、北京）

1 はじまり

江西省南西部の中心に位置する吉安県の西側地域は、一本の長い帯のようになっていて、吉水・泰和・興国・永豊の四県と境を接している。この带状の地域の中にある富田村は、十数個の小さな自然村落からなっている一つの大きな村である。土地革命の時期、五つの県が接しあうこの富田は、かつて一度、中共江西省党委員会と江西省ソヴィエト政府の所在地となったことがある。この村に、今から六九年前、党の内外、紅軍の内外を震撼させた「富田事変」が爆発した。この時から、江西省の西南に位置する、このありふれた一寒村は歴史の非情さによって、その名前を現代史に刻むことになった。

中華人民共和国建国の後、かつて中央ソヴィエト区が形成された江西省には、非常に多くの区や県が「老区」(抗日戦争終了以前に、中共政権が樹立されていた地区、古くからの解放区を一般に「老区」という)と見なされて、多くの特別手当、社会保障が与えられてきた。しかしこの富田は、所属する吉安県や境を接する四県が皆「老区」という赤色特別地域に指定されたのに、ここだけは指定からはずされ、白色地域の小島になった。その理由は、かつてこの村に「富田事変」がおこったという、ただそれだけの理由からであった。

2 富田事変の経過

一九三〇年二月三日午後、紅第一方面軍政治部秘書長で肅反委員会主任でもある李韶九(湖南人、早くから江西省ゲリラとして活動、当時毛沢東に臣従)は、紅十二軍の一中隊を率いて「総前委」(紅第一方面軍の最高首脳部である前敵委員会の略称。書記毛沢東が最高権力を握る)が置かれていた寧都県の黄陂から、江西省行動委員会(江西省ゲリラが母体、反毛沢東派の李文林が書記)の所在地であった吉安県の富田にA B団を鎮圧しようとして

出発した。

黄陂から富田までの距離は五〇キロほどに過ぎなかったが、当時この一帯は、敵と味方の勢力区域がジグザグに入り混じっており、白区と赤区がちやうど紅白の花が花瓶に一緒に挿してあるような状態になっていた。それで李韶九の一中隊は、まるまる四日もかかって、一二月七日の午後三時になってやっと富田に到着した。李韶九は、到着するやいなや兵に命じて、江西省行動委員会と江西省ソヴィエト政府を直ちに包囲した。そして会議中であつた何人かの責任者を縛り上げ、部屋の箆笥や箱をひっくり返して、各部屋を探し回り、殺気紛々という状態になつた。この時、逮捕された人々の中には、次のような人々がいた。

贛西南特委秘書長・省行動委員会代理秘書長の李白芳 (注)「贛」とは江西省の古名である。

江西省ソヴィエト政府常務委員・省委員会軍事部長の金万邦

同省ソヴィエト政府財政部長の周冕

紅二十軍政治部主任の謝漢昌

贛西南団特委書記・省行動委員会常務委員の段良弼

江西省ソヴィエト政府秘書長の馬銘

その他に劉万青、任心達を含め計八人が即座に逮捕された。

彼等を逮捕後、李韶九は自ら尋問を指揮し、一切の弁明を許さず、ただAB団であること、誰それもAB団であること、この二点だけを自白するよう強要し、認めないと、「地雷公焼香頭」・「点点燈」・「女的焼陰戸」(拷問の種類名、詳しい内容は不明)などの残酷な拷問を行った。

一夜の内に、江西省の党とソヴィエト政府の指導者から一般職員まで一二〇余人が逮捕され、連夜に亘って拷問が続き、悲鳴が夜空をおおった。捉えられた紅二十軍政治部主任の謝漢昌は、ついに耐えられず同軍一七四団の政治委員の劉敵も自分と同じくAB団であるとウソの自供をした。これは一二月八日の夜明けのことであった。

それで李韶九は、目を富田から二〇キロ離れた紅二十軍の駐屯地である東固に向けた。これより先、李韶九が黄陂から出発した日の翌日、つまり一二月四日、総前委（書記の毛沢東）は、すでに前に逮捕して厳しく取り調べていた人から、AB団に関する新しい自供が得られたと言う理由で、総前委の秘書長であった古柏（江西尋鄔人、二九年より毛沢東に臣従、当時は総前委の秘書長）を富田に追加派遣し、AB団肅清の体勢を強化した。古柏一行は八日に富田に到着した。

李韶九は、古柏と曾山（江西吉安人、二九年より毛沢東と親密になる、当時は江西省ソヴィエト政府主席）に省委員会の関係者の取調べを任せ、また陳正人（江西遂川人、二八年より毛沢東と親密になる、当時は江西省行動委員会常務委員、宣伝部長）に、贛西路行動委員会の王懐（江西永新人、反毛沢東派、江西省行動委員会の書記）を捕えに行くよう命じ派遣した。そして自分は一隊を率いて謝漢昌を連行しながら東固に向かい、紅二十軍のAB団を逮捕することにした。

一二月九日、ちょうど李韶九が朝飯を終えて出発しようとした時、蒋介石軍の飛行機が富田一帯を爆撃した。李は捕えていた容疑者が逃亡するのを防ぐため、重要でない二五人をロクロク尋問もせず、そそくさと処刑して東固に出発した（後の曾山の報告では、この前後で四〇余名を処刑したという）。

紅二十軍一七四団の政治委員の劉敵（湖南醴陵人、井岡山一帯でゲリラ戦を指揮、紅二十軍軍委秘書長を歴任）

は、独立營の軍隊を率いて、その時ちようど前線に出ていた。彼は軍本營から至急帰れと言う命令を受けると、これは戦いに勝ったので慰勞品を支給されたり、兵力を増強してくれる話だと思った。しかし、帰營するやいなや、こともあろうにA B團の重要犯人として逮捕され、李韶九から尋問を受けることになった。劉敵は李と湖南省の同郷で古くからの知りあいであり、李の人柄もよく知っていたので、長沙言葉を使い雑談したり、李の言葉にあいずちをうったりしたので、次第に李の信用を得ることになった。李は劉敵をA B團と見なさないどころか、逆に劉敵に立派にやるよう求め、将来は紅二十軍をお前にまかすなどと言い、護衛をつけて本營に送りどけた。

運良く危険を脱した劉敵が本營に帰ると、大隊長の張興と政治委員の梁貽は、よく無事で帰ることができた大変喜んだ。劉敵がその日のことを一通り話すと、張と李は怒り心頭に発し我慢できなくなった。

二日目の一二月二日、劉敵は朝食が終わると二人を捜し、自分の考えを話した。今回、李韶九が来た目的は、きつと総前委（書記の毛沢東）が江西省の党と軍の幹部を消滅させる陰謀であろうと。ここで、三人は李を誘い出し、チャンスを見て彼を拘束しようと相談した。しかし、血気にはやった張興は、待ちきれずに、軍本部に行つて詰問した。これは自ら網に身を投ずる結果となった。劉敵は張興が捕えられたと聞くと、直ちに梁に部隊を集結させて、軍本部を包囲し、捕われていた謝漢昌、張興らを解放した。そして李韶九に協力した紅二十軍軍長の劉鉄超（湖南豊陽人、黄埔軍校卒、毛沢東側の人物）を捕えたが、李を取り逃がしてしまった。

劉敵は、李が密かに富田に逃げ帰って、そこで捕らわれている省委員会の同志たちを処刑するのを恐れ、直ちに一七四團の機銃部隊と独立營を率いて富田に向けて急行した。夕方、劉敵らは富田に到着し、省委員会の建物を包囲し、李が率いてきた紅十二軍の部隊を武装解除し、段良弼など捕らわれていた同志を解放した（その他、全体で

李白芳など七〇余人を解放)。この時、陳正人はまだ軍本部に帰っておらず、また曾山、古柏は夜陰に紛れて逃亡した。(彼等は古柏夫人、陳正人夫人などを伴い、富田から暗夜に紛れて逃亡した)。劉敵らは、党中央から資金調達の名を受け、福建省の西部の根拠地を巡回しながら富田に来ていた易爾士(本名、劉作撫)を誤って逮捕した。以上が、中国現代史に名高い富田事変の概要である。

3 富田事変後の大波乱

この夜、事変を起こした人びとは夜中に緊急会議を開き、李韶九がやったことは総前委の書記毛沢東が命じたことであり、「毛沢東は第二の許克祥(如何なる人物か不詳…小林)である」と認定した。そこで、総前委が富田に派兵してくれば、紅軍同士の衝突になるかもしれない。それを防ぐため、紅二十軍は西に脱出して贛江を渡り、永陽に行き、そこに進駐することを決定した。

二日目(二月一四日)の朝、紅二十軍の將兵は富田広場で兵士大会を開催した。そこで救出された兵士が事件の経過を報告し、李韶九の悪行を訴え、またある同志は下着を脱いで満身創痍の身体を見せた。すると会場の人びとは皆憤激して「毛沢東を打倒し、朱德、彭德懷、黄公略を支持する」(黄公略は湖南湘郷人、毛沢東の古くからの同志)というスローガンを叫んだ。

段良弼らは、誤って捕えた易爾士を釈放して謝罪した。易は、党中央の許可を得ていない段階で、こんなスローガンを叫ぶのは誤りであると指摘したので、段はこの批判に同意した。

富田事変の指導者たちは、段を代表者にして上海に派遣し、党中央に報告することにした。劉敵も党中央に丁寧

な長文の書簡を書き、事件の経過を説明し、自分の犯した誤りは承認し、処分を要請した。さらに、彼らは、党中央の財政が逼迫していることを考慮して、自分たちが所蔵している金塊二〇〇斤（二〇〇キログラム）を易を通じて党中央に献金することを決定した。

富田事変の指導者は、一二月中に紅二十軍の兵士を連れて、贛江を西に渡った。翌一九三一年の一月五日、段良弼は数十両の金と一万字に近い「富田事変前後の状況」なる報告書を持って上海に出発した。段は白区を避けて各地を転々としながらやつと上海に着き、任弼時（モスクワ東方大学卒、党中央委員、当時中共長江局常務委員）と博古（本名は秦邦憲。モスクワ留学生、帰国後党中央の最高権力を握り、王明路線を執行）に会い、金塊と報告書を党中央に渡した。この報告書は、事件の経過及び江西省行動委員会（書記は李文林、彼は富田事変が起る直前の三〇年十一月末に、毛沢東によって秘密裏にAB団分子として逮捕されて、行方不明になっていた）と毛沢東との間で行われた、十項目に亘る論争を詳細に説明していた。そして、段は説明書の末尾に「私、段の誤りに関しては、党中央の処罰を求めます。どのような処罰でも甘んじて受けます。ただし、私の工作能力は低いのでモスクワに派遣し学習させていただきさるよう御願いたします」と書いた。この毛筆で唐紙に書かれた報告書は、今でも中央档案馆に保存されている。

段良弼は、幸か不幸か、党中央の温裕成と会う前に、党中央が「富田事変はAB団の陰謀である」と決定する動きを知って、一人密かに党から立ち去り、歴史の闇に消えていった。この江西省委常務委員は、不幸にも革命の生涯を中断したが、しかし幸運にも後にAB団分子とされ、冤罪で処刑されることを免れた。

段良弼が革命陣営から去った後、富田事変の指導者たちはそれを知らず、党中央の決定を待ちつつ、これまでと

同じく他の紅軍と肩を並べて蒋介石の白軍と独自に戦っていた。

総前委（書記毛沢東）の富田事変の指導者に対する態度とは異なつて、新しくソヴェト中央局の代理書記となつた項英（湖北武昌人、労働運動を指導、江蘇省委書記、中共中央長江局書記）は、富田事変指導者の嚴重な誤りを指摘しながら、また一方で総前委の度を越した行動を厳しく批判し、この事件は党内矛盾を解決する方法をもつて処理すべきであるとした。しかしながら、六届四中全会（一九三一年一月上海で開催、モスクワ帰りの王明がミフの支援を得て中央政治局常務委員となり、極左路線を開始）後の左傾化した中央政治局は、一九三一年三月二八日に「富田事変に関する決議」を行い、富田事変の性格は「A B団が指導した反革命暴動である」とであると決定した。また、党中央から任弼時、王稼祥（モスクワ留学生、中共中央宣伝部長）、顧作霖の三人が「富田事変の全権処理」を任され、党中央代表团として江西省に向け上海を出発した。

4 「富田事変」指導者と「紅二十軍」將校に対する大粛清の開始

任弼時ら一行三人は、一九三一年四月一七日、福建省の秘密の地下通路を辿つて江西省寧都県の青壙村に到着した。彼らは党中央政治局の決定を伝え、項英の正確な処理方針を否定し、彼の代理書記の地位を解任し、改めて毛沢東を代理書記に任命した。

不幸なことには、その翌日、つまり四月一八日に、先に項英の指示によつて会議に参加しようとしてやつて来た、贛西南特委の責任者と富田事変の指導者たちが、ソヴェト区中央局の所在地である青壙村に到着した。しかし、彼らは前日に事態が一変しており、項英は辞職させられ、会議開催は中止、そして自分たちは裁判にかけられ

断罪される運命にあることを全く知らなかった。

彼らが村に到着するやいなや、直ちに一網打尽となり、続いて公開の裁判集會が開かれた。彼らは自分たちが革命に叛くA B団であるとは決して認めなかった。大会後、首魁とされた劉敵は直ちに銃殺され、他の人々もほどなく処刑された。四月一九日、ソヴェト中央局は、上海の党中央に「富田事変はすでに解決された」と報告した。

A B団と疑われ、蔑視されていた紅二十軍の將兵は、この時にはまだ贛江西側の永陽一帯で蔣介石軍と戦闘を続けており、広西から転戦してきた紅七軍（広西省で戦っていた鄧小平が率いる紅軍）と連携して戦い、幾度か大勝利を収めた。しかし、ほどなく紅二十軍は、興国・雩都（現在の于都）一帯に移動するよう命令された。

三一年七月、彼ら紅二十軍の將兵は、苦勞を重ねて各地を転戦しつつ雩都県の平頭寨に到着した。しかし、誰もここが紅二十軍の最後の地になるとは知らなかった。山里の朝はひとときは涼しく爽快だった。彼らが朝食を食べ終わると、副小隊長以上の將校が謝家の祠堂に集められた。彼らが集合するやいなや彭德懷と林彪の部隊が銃器を取り上げて武装解除した。そして七〇〇名から八〇〇名に上る將校・士官を各集団に分けて縛り上げた。この中には紅二十軍軍長の蕭大鵬（江西雩都人、黄埔軍校卒、贛南紅軍指導者）、政治委員の曾炳春（江西吉安人、ゲリラから紅軍指揮官へ、紅二十軍軍長を歴任）も含まれていた。彼らは部隊の編成番号も廃止すると宣告され、ほどなくこの歴戦の勇士たちは全員が殺害された。

ただ二人だけ幸運にも難を免れた。一人は小隊長の劉守英で、彼はこの日当直にあたっており、いち早く情況を知って逃亡した。もう一人は一七二団の副官の謝象晃で、富田にきた紅第一方面軍副官長の楊至誠を知っていたから助けられた。劉守英は後に八路軍の連隊長となり、百団大戦（一九四〇年、彭德懷が指揮する八路軍が、山西省

で日本軍と戦った大会戦）で英雄的に戦い戦死した。謝象晃は建国後、前後して江西省民政庁庁長や江西省人民大会副主任などを歴任した。

富田事変をA B団による反革命政変であると結論し、紅二十軍を消滅させるという極左路線を執行した党中央指導者たちは、それによって全国各地のソヴェト区で大規模な粛清運動の高揚をもたらした。こうして革命に忠実な数千、数万の優秀な男女が濫殺されることになったのである。数年間の短期間に、「A B団」として七万余、「改組派」として二万余、「社会民主党」として六二〇〇余の同志達を、それぞれ殺害した。しかし、現在の歴史研究によつて、党内には初めから「A B団」といった組織は存在せず、皆冤罪であつたことが証明された。

一九二八年の建国以後、党中央はソヴェト区で無実の罪で殺害された一部の人については名誉を回復した。と云うのは、一九五六年に中央団が組織され、彼らは各ソヴェト区を訪問し、八四二七名を冤罪で殺された者として名誉回復した。しかし、遺憾なことには、この八千余名は反動分子ではないが、しかし烈士とも認められなかつた。富田事変の指導者に至つては、当時の「A B団叛逆事件」が党中央の絶対的結論とされ、見直されることはなかつた。

5 戴向青ら富田事変の再審査を要請

一九二八年に、吉林省舒蘭県に生まれた戴向青は、一九四六年に革命に参加したが、その時わずか一八歳であつた。彼は、一九四九年、南下工作団について江西省に來た。これが一生涯にわたつて江西省にとどまり、長期にわたつて中共党史を研究したり、教育に従事する契機となつた。

一九五〇年代初期、戴はある機会に江西省の南部、南西部、東南部に行った。そして、これらの地域の二〇歳代、三〇歳代以上の人々は、A B団を知らない人はなく、皆その話を聞くと慄然として恐れ、顔色が変わることを発見した。彼ら旧ソヴィエト区の人びとは、一九三〇年代のA B団肅清運動の際の濫捕乱殺、つまりでたらめにA B団として人を捕らえてたために殺す情景を忘れず、数十年後になっても恐怖に慄いていたのである。A B団として処刑された人の子孫、親類縁者は、長期にわたってA B団関係者と見なされ差別を受けてきた。彼らは民兵隊長になることさえできず、もちろん共産主義青年団、共産党への加入や進学、就職の際にも不利に扱われてきた。富田事変の指導者たちは、家が貧しくとも地主階級出身者と見なされた。戴向青は彼らに大変同情したが、しかし『毛沢東選集』に、「A B団は、当時、赤色地域に潜伏していた特務組織である」と書かれている以上、何らなすべきすべがなかった。

一九五六年、戴向青は中央党校に進み学んだ時、系統的に歴史資料に触れる機会があった。そこで、彼は、一九三一年三月二八日に党中央政治局が出した「富田事変に関する決議」を見た。読み終えると、思わず全身に寒気がした。なぜなら、この文章の中に、富田事変の指導者が「毛沢東を打倒せよ」とのスローガンを叫んだとあったからである。あの時代、この文句一つだけでも身を滅ぼし助かることはなかったからだ。

その後、戴向青は何回か江西省南部に行った。しかし、この一帯の人びとは誰も、一九五〇年代の初めに中央慰問団がかったの革命根拠地に来た時、誤って殺されたかなりの同志の名誉回復を行ったこと、当時の反革命肅清には拡大化の誤りがあったと述べたこと、等々を全く知らなかった。しかし、戴は考えた。どこをどれだけ誤ったのか、どの程度まで誤りを拡大化したのかと。こうしたことと比較的正確な基準が示されていないなかったので、充分に

人を納得させる根拠が欠けていた。戴は疑問をもった。しかし、当時の雰囲気では、疑問がいっぱいあっても抑える以外、何も言うことは不可能であった。

こうして、彼は四人組が打倒される時まで、つまり一九七八年の党十一期三中全会の開催まで待たねばならなかった。一九七八年末、江西省党委員会の党校党史研究室の主任であった戴向青は、同僚たちと一緒に江西省南部一帯に行き、正式に調査を開始し、A B団と富田事変の史料を集めた。年若い羅惠蘭も教師たちについて農村に入り、この仕事に従った。彼らは江西省のソヴィエト区の大部分の県・市を訪問し、その土地の档案館、記念館から史料を捜した。当時まだコピーがなかったので、数十万字の史料はみな手書きに頼った。また村々にも行き、幸いに生存して事情を知っている老人に聞き取り調査を行った。こうして数ヶ月の時間を費やして貴重な歴史資料を沢山収集した。その中には、当時肅清を体験した人びとの回顧録、例えば最初の江西省ソヴィエト政府主席の曾山の「宣言」、江西省行動委員会宣伝部長の陳正人の手紙、一九三〇年の工農革命委員会の六言体の布告などがあった。(中略)

戴向青は、大量の資料収集と深い調査分析によって、A B団大肅清と「反革命富田事変」は、冤罪事件であり誤審事件であると確信した。戴は、しばらくして「富田事変の性格およびその歴史的教訓を略論する」という論文を発表した。

一九七九年九月、江西省党史学会と現代史学会は、南昌市で創立大会を開催した。戴が先の趣旨の文書を会場で配布すると猛烈な反響が沸き起こった。この時、江西省委副書記で省党校校長の馬継孔の支持を得て、この論文は一九七九年の『江西大学学报』(第四期)に発表され、史学界でさらに大きな反響を巻き起こした。(中略)

一九八〇年末、全国史学会創立大会が、北京で開催され、戴向青はこの大会で学会理事に選出された。そのため、彼は中共党史学会の顧問である蕭古（湖南嘉禾人、黄埔軍校卒、北伐戦争、紅四軍師団長、建国後に將軍に昇格）に接触する機会をもった。戴は自分の何篇かの文章を、この老將軍に贈呈し教示を願った。

6 蕭古將軍、「AB團肅清・富田事變」の見直しに賛成

蕭古は、一九三〇年代初期、総前委（書記毛沢東）が行った「黄陂肅反」と江西省ソヴィエト区で大規模に行われた「AB團肅清」を實際に体験した人であった。蕭古は、一九八一年三月から八月にかけて、歴史の目撃証人として、中央組織部、中央党史資料収集委員会とその関係会議に対して、自分の見解を表明し、これらの事件の徹底的な解明を要請した。八二年五月、蕭古はまた中国革命博物館の要請に応じて、再びAB團肅清と富田事變に就いて語った。この談話の中で、彼は、中央ソヴィエト区におけるAB團肅清と富田事變のおよその経過を回顧して、富田事變の主要な原因は、当時の濫捕乱殺の情況が矛盾の激化をもたらし、この事變を生み出したものとした。この蕭古の談話は、中国革命博物館の内部刊行物である『党史研究資料』に掲載された。これと同時に、蕭古の秘書の国琦・東霞夫妻が書いた二万字に及ぶ「江西ソヴィエト区初期の反革命肅清と富田事變」なる文書が発表された。蕭古將軍の地位、経歴、それに「實際に体験した人」としての威信が、大きな反響を巻き起こすこととなり、ついに党中央の最高指導層から注目されることになった。こうして富田事變の真相解明が、日程に上ることになったのである。

7 党総書記の胡耀邦が、馮文彬に再調査を指示

戴向青が富田事変に関する最初の文章を発表してから、半世紀が過ぎて、やっと連座、冤罪を被った人びと、その親族が、無実の罪を晴らして欲しいと願い出てきた。そしてかすかに光が見えるようになったのである。先に言及した、紅二十軍の士官が皆殺しにあった時、助かった江西省人民代表大会副主任の謝象晃は、もちろん戴向青に大いに感謝したが、よそから来て最初に戴に感謝を表明したのは、湖北省黄石の汪安国であった。この九〇歳に達する高齢の老人は、当時は江西省の西南にある安福県の書記であった。一九三〇年、公務で東固に行き、仕事の件で指示を請うたところ、李韶九からAB団として捕えられてしまった。劉敵に解放されたが、翌年の四月、又捕えられた。しかし、彼は脱走し、遠く故郷を離れて各地を放浪して歩いた。また、一九八〇年、富田事変の当時、江西省ソヴェト政府秘書長であった馬銘の息子が、鉛山県から戴向青をわざわざ訪ねてきた。そして、父が二八歳でAB団分子の冤罪をかけられて処刑されてから後の、母と舐めた辛酸を語った。またある河南省の青年は、はるばる千里の遠方から江西にやってきて、戴向青と羅惠蘭に、自分の伯母の曹舒翔を捜すのを手伝って欲しいと頼んだ。その伯母は革命に参加してからソ連に留学したが、帰国後まったく音信不通になったという。戴と羅は、その話を聞くとぐっと気が重くなった。なぜなら、その伯母はAB団分子としてすでに処刑されており、一九三三年三月一五日付きの『紅色中華』に判決書がはっきりと掲載されていたからである。こうした慨嘆に堪えない話は枚挙にいとまがない。こうしたことも、戴向青らの責任感をさらに高めた。

もう一つ、富田事変の名誉回復をするために必要なことは、あの当時、ソヴェト区に反革命のAB団が本当に存在していたのか否かという問題であった。もし、AB団がいたとすれば、それを肅清することは必要なことであ

り、乱打乱殺は「拡大化」したというに過ぎない。しかし、戴向青らはAB団関係の資料、その中にはAB団の頭目とされた段錫明（国民党員で、最初に共産党に反対するAB団を創った）の自供書も含まれるが、それら総て調査研究し、最終的に、「AB団肅清は、拡大化したに過ぎない」とする見方を否定した。かれは「AB団肅清は、拡大化したのではなく、根本的に誤りであった」とい文章の中で証拠をあげて「当時、党内にAB団なるものは全く存在しなかった。AB団打倒は、なんら拡大化などではなく、根本的な誤りであった」と断定したのであった。

党史研究者の努力と革命第一世代の要請を経て、この中国革命史上最大の冤罪事件は、ついに党最高指導部の注目するところとなった。一九八六年六月、中共党史資料収集委員会の主任である馮文彬と副主任の馬石江は、上部からの命を受けて、湖南省、江西省一帯の調査に行った。（中略）彼らが湖南から江西に入った後、戴向青が随行して萍郷、南昌を経て井岡山、吉安、瑞金、富田、東固などの土地を巡り調査研究した。そして馮と馬は、戴に「中央の指導者の意見では、この問題は当然解決されるべきだ」と言った。中央の指導者とは、当時、中共中央の総書記胡耀邦（湖南人、鄧小平に抜擢され、対外開放、冤罪の見直し、民主化に努力したが、保守派に迫られて一九八七年に失脚した）を指していた。

馮と馬は江西で半月間調査し、去る時にAB団と富田事変に関する資料を全面的に整理する任務を戴向青に託した。（中略）戴の報告書が北京に届くと、それは直ちに中央指導部に提出された。ところが、久からずして中央に重大な人事変動が発生した。一九八七年一月、胡耀邦同志が総書記を辞任したのである。しかし、これによって富田事変の見直しが止まることはなかった。

一九八七年、中央は関係部局を招集し審議した結果、（中略）名誉回復に同意し、多年引きずってきた誤りを糾

すべきであるという意見に一致した。こうして最終的な解決案がまとめられ、党中央に提出された。慎重を期するため、馮の秘書の陳文斌は数度にわたって江西省に来て、具体的な状況を確認したりした。陳は戴に対して、この問題は解決の希望があると言ったので、戴は大いに安堵を感じた。

8 楊尚昆が解決を指示

一九八八年、陳雲（江蘇人、建国後、中央政治局常務委員、中央委員会副主席などを歴任）はAB団と富田事変に関する調査資料を見て、次のような指示を書いた。「楊尚昆同志は、この案件を知っておろうが、私は当時江西に居なかったので、よく分らない」と。楊尚昆（四川人、ソ連留学、建国後中央政治局委員、国家主席などを歴任）は、中央党史工作の責任者であり、一九三二年に中央ソヴェト区に入り、紅三軍団政治委員を歴任したことがあったから、AB団粛清も富田事変も知っていた。彼は調査資料と陳雲のメモを見て、「この問題は当然解決すべき問題である。中央档案馆は、よく材料を集めて準備をすること、また専門の小組を立ち上げて、これらの歴史問題を責任を持って解決することが必要である」と指示した。（中略。中央組織部の中に八人のメンバーによる「富田事変調査小組」が作られ、戴向青もその一人として参加し）、戴はさらに多くの資料を目にした。（中略）その中には、先にAB団団長の冤罪を科せられた段良弼が、党中央に当てた一万語にも上る文書や紅一七四団政治委員の劉敵が党中央に当てた手紙が含まれていた。これらの根本資料は、さらに詳しく正確に「富田事変はAB団が指導する反革命の暴動である」というのは、全くのでたらめの非難であり、「中央ソヴェト区が粛清した数千数万にのぼるAB団分子」とは、拷問による自供の産物に過ぎない、ということを明確に示していた。

再審査小組の富田事変に関する結論は早く一致したが、劉敵の名譽回復を行うかどうかについては異論があった。戴向青は大いに論陣を張り、劉敵は反革命の首領でないばかりか、逆に革命に対して功勞があったと主張し、次のように述べた。あの時、生殺与奪の大権を握っていた李韶九は、劉敵に対する疑いを晴らしてその肩をたたき、「私の話を聞くならお前を紅二十軍の軍長にしてやろう」と言った。もし、この時、劉敵に私心があつて、李韶九に従順になりさえすれば出世することができた。しかし、劉敵は私心、雑念を棄てて、兵を率いて無実の罪に陥っていた人びとを救出し、ついには自分が無慘に殺される羽目になった、のだと。

再審査小組は統一認識に達した後、富田事変に対する名譽回復を行う文書を作成すること、それを戴向青が書くことが決まった。この文書は、「富田事変に関する調査報告」と題し、一万余字に達した。戴はこの文書の作成が終わると、北京を離れ江西に帰った。時に一九八九年二月であつた。小組は、さらにこの文書の字句の校正、改修を行い、同年春の終わりから夏にかけての頃に党中央に提出した。(中略)しかし、この文書がなかなか公表されないで、戴向青は小組に何回か催促したが、何の回答もなかつた。一九九一年、中国共産党建党七〇周年記念を迎えたが、この時もこの文献は公表されなかつた。(中略)しかし、別の形で、成果が世に出ることになった。というのは、この時出版された中央党史研究室編の『中国共産党歴史』(上巻)と胡繩主編の『中国共産党的七十年』の両書は、「AB団」と「社会民主党」に対する肅清は、全くの憶測と自供だけを信じた結果生まれたものであり、敵と味方を混同し、多数の冤罪、誤審を行つて生じたものであると、明確に記述したからである。

富田事変の名譽回復を表明した専門の党文献は、世に出なかつた。しかし、これらの書物は、その持つ高い權威により人びとが内心で思っていることを明記したものであり、またこの歴史問題に対する最高の見直し判決書であ

ると見なすことができる。しかし、遺憾なことに『中国共産党歴史』（上巻）が出版されたわずか三年後に、戴向青は積年の苦勞によって病に罹り世を去った。

以上訳稿

訳者付記。本訳文中の（ ）内は、皆訳者が加えた説明文である。本論文の中には、毛沢東を名指して記した箇所はない。すべて「総前委」（総前敵委員会の略称）としており、書記の毛沢東の名を憚ったものと想像する。

第三章 毛沢東の紅軍肅清、富田急襲の真相

——毛沢東はなぜ同志肅清に打って出たのか——

本章では、革命根拠地でAB団肅清を本格的に開始し、「紅軍内部での黄陂肅反」、「富田・東固の同志肅清」を實行したのは、毛沢東であったことを明確にし、彼がなぜそれを行ったのか検討したい。黄陂とは、毛沢東が紅第一方面軍の本営を置いた江西省寧都県に属す比較的大きな村の名である。

さて、中国では中共最高の「偉人」である毛沢東主席の威信を恐れ、また中共党の神聖な歴史と神話に傷がつくのを恐れて、これまで現代史や中共党史、さらには個人の伝記や年譜にいたるまで、AB団肅清、富田急襲の真の実行者が毛沢東であったことを誰でも知りながら明記しなかった。先の景玉川論文でさえも、例外ではない。多くは、「工農紅軍第一方面軍総前委」（一九三〇年八月二三日に成立）は、と書くだけで毛沢東の名は伏せている。

「総前委」とは、総前敵委員会のことであり、書記は毛沢東、秘書長は古柏、委員は毛沢東、朱徳、周以栗、彭徳懐、滕代遠、黄公略、林彪、譚震林等であった。毛沢東と書くのをはばかって総前委と書くのである。そして毛沢東の直接の権力機関である総司令部秘書長兼肅反委員会の主任が李韶九なのであった。

毛沢東が実行した、三〇年一月末の麾下の紅軍に対する「黄陂肅反」、これとほぼ同時に行われた同年一二月前半の「富田急襲」は、毛沢東が李韶九、古柏に命じ、さらに江西省ソヴィエト政府（一九三〇年一月七日に成立）の主席曾山、副主席陳正人を加えて実行したものである。これらの人びとは、毛沢東の側近中の側近であった。毛沢東がこれらの人々に命じて、同志肅清を実行したのである。その過程を次に検討する。

毛沢東の一九三〇年の革命路線、革命思想の推移

(1) 毛沢東の「二・七会議」陂頭会議（一九三〇年二月六日〜九日）における主張と行動

この会議は江西省の吉安県陂頭村において開催された。紅四軍（前委書記）の毛沢東が主催し、贛西特委代表の劉士奇・曾山、紅六軍軍委代表の黄公略、江西省委巡視員の江漢波など約五〇余人が参加した。先ず、毛沢東が当面の内外の政治情勢を報告し、直面する課題について報告した。「中国ソヴィエトはソ連ソヴィエトに引き続いて出現し、世界ソヴィエトの有力な支柱になろうとしている。中国の中で真っ先に出現するのは、江西ソヴィエトであろう」(一)とし、江西での土地革命を実行してソヴィエト区を拡大し、江西省を奪取することを提起し、承認された。

この会議で、毛沢東は自分に反対する江漢波を党から除名し、さらに江西省西部で地方武装を指導してきた郭士

俊・羅万・劉秀啓・郭象賢の四名に対して「四大党官」というレッテルを張り銃殺した。毛沢東が主催する聯席会議は、「贛西党・贛南党の中には、嚴重な危険が存在している。というのは、地主富農が党の各級の地方指導機関に充滿し、党の政策は完全に機會主義の政策になっている。もし、それを徹底的に肅清しなければ、党の偉大な政治任務を果たせないばかりでなく、革命は根本から失敗に帰すであろう。聯席會議は党内の革命的同志に呼びかける。起ちあがつて機會主義の政治を打倒し、地主富農を党内から追い出し、党の迅速なボルシェヴィキ化を推し進めなければならぬ」と宣言し、党内から地主富農を一掃することを呼びかけ、実際に著名な上記の活動家四人を銃殺した⁽³⁾。

さらに、この會議に於いて、毛沢東は、江西省南部の党責任者であった江漢波、李文林らが提出した「豪紳地主の土地を沒收する」というスローガンは、「完全に農村資産階級の路線をとるものだ」、「労働者階級が農民を取り込む政策を台無しにするものだ」、「土地革命を全面的に取り消すトロツキー・陳独秀たちの解党派の路線である」と激しく批判し、「豪紳地主の土地を沒收するにとどまらず、民衆が真にそれを望むなら、自作農の土地も沒收して分配すること、すべての耕地、山林、池塘、家屋でさえもそれらを必要としている人びとに分け与えるべきである」とした。

また先に記したように、江漢波を党から除名し、李文林（贛西南特委常務委員兼軍委書記）をその地位からひきはなし、「贛西南ソヴェト政府秘書長兼党団書記」なる地位に左遷した。毛沢東のこうした強引な且つテロリズム的なやり方は、党内に大いなる反発を招いたという。

「党内の赤色テロリズムは、党内の『四大党官』の解決に銃殺という良くない手段をとったので、民衆や黨員は

皆な疑惑を生じた。(中略) また多くの同志が出張の仕事に応じなくなった。なぜなら、仕事に出ても誤解されて処分を受けるのではないかと心配したからである。(中略) また同時に、富農に対する闘争を強化した時、党から除名した富農分子を銃殺し、劉士奇同志などは党員を説得するのではなく、不満な時には「銃殺するぞ」などといったも罵っていたからである」(4)。毛沢東の「四大党官」銃殺という極左的行為は、以後江西省の革命活動に多くの禍根を残すことになった。

注

(1) 「前委通告第1号：—聯席會議的結論并宣言前委成立」一九三〇年二月一六日發『中央革命根拠地史料選編』中冊、一七二—一七四頁。

(2) 同上、中冊、一七二—一七四頁。

(3) 現在の史家は、この毛沢東が主催した會議を論評して、こうした意見の違う党員を銃殺したり、地主富農が党内に充滿している、彼らを党から一掃せよと叫ぶやり方は、以後、党内闘争を激化させ、「A B 团」肅清や党内の革命勢力を乱打濫殺する先例、先鞭となった、として厳しく批判している。(余伯流、凌歩機共著『中央蘇区史』一六〇—一六二頁、江西人民出版社、二〇〇一年)。

(4) 「贛西南劉作撫同志(給中央的綜合性)報告」(『中央革命根拠地史料選編』上冊、二五六頁)。

(2) 袁文才、王佐の暗殺事件(一九三〇年二月二四日)をめぐって

上記の二・七會議(陂頭會議)が終わった約二週間ほど後の、二月二四日の未明、永新县委書記の王懷、寧岡县委書記の劉超清ら土籍の革命勢力は、彭徳懷の部隊の力を借りて、井岡山革命根拠地の主とも言うべき袁文才、王佐の二人を騙して永新県におびき出し、夜明けに寢所を急襲して殺害した。これまでの党の説明は、概略こうし

たものであった。

一九二八年、毛沢東が軍隊を率いて井冈山に登った時、この山一帯に盤居していた客籍（客家）の土匪袁文才、王佐は、毛沢東を歓迎し、ついには毛沢東に信服して、その軍門に下った。そして、袁文才は一九二八年に成立した「湘贛辺界工農民主政府」の副主席（主席は毛沢東）となり、一九二九年に編成された工農紅軍第四軍の参謀長（軍長は朱徳）の地位に就いた。また、王佐は、文字が読めなかったというが、一軍団を率い、井冈山一帯の緑林（土匪）出身の紅軍部隊を率いて戦い、袁に継ぐ権威をもっていた。この二人を、土着の党幹部が彭徳懐の支援を得て謀殺するという事件が起った。いったい如何なる背景があったのか。

中国革命ソヴェエト区史に関して最も権威ある『中国蘇区辞典』（陳立明、邵天柱、羅惠蘭が主編、江西人民出版社、一九九八年）は、次のように説明している。一九二八年七月、モスクワで開催された中共六大大会は、ソヴェエト区の党内にいる土匪勢力を武装解除し、その首領は殲滅することを決議した。この大会の決議を持って、中共特派委員の彭清泉（本名、潘心元）が直接江西省の永新県に来て指揮をとり、袁・王の二人を永新県城内に誘き出した。そして湘贛特委書記の朱昌偕が彼らが寝ている部屋を急襲して袁文才を殺した。王は危険を感じて逃げ出したが、川で溺れて死んだ。この時、彭徳懐は、袁・王が罪悪を行い、また謀反を企てていると聞き、部隊を出して謀殺を支援した。袁・王二人の護衛四〇人もこの時に殺された（頁一八）。

この謀殺事件で彭徳懐がとった行動は、後に毛沢東主席の意に反して行ったものと批判された。それに対して彭徳懐は、『彭徳懐自述』において「紅四軍が井冈山を離れる時、毛沢東主席は袁文才に対していろいろ働きかけ、やっと袁が紅四軍に従って出征することになった。出陣の前に、毛主席は私に、袁という人物は大変狡猾な人間で

あり、手練手管が非常に多い。彼が紅四軍政治部に従って出陣することになったので、われわれが出発してから後の井冈山の防衛は困難が少なくなった、と言ったことがある」(1)。

「一九三二年、富田事変の指導者と紅二十軍が贛江の西の永新に離脱した後、私は毛主席とどのようなしたら彼らを取り戻せるか話したことがある。その時、私は毛主席と袁文才・王佐のことを話した。毛主席は(モスクワで開かれた)六全大会の文書を討議した時、彼らを会議に参加させるべきではなかったと言った」(2)と述べている。

また、彭徳懐はまた廬山会議で失脚した後に、北京で彼を批判するために開かれた軍事委員会拡大会議において、毛沢東の意に反して、袁・王謀殺を行ったと批判された時、自分が特派委員の言を輕輕しく信じたことは間違いであったとしても、私に袁・王のことを話した特派同志にも責任がある。あの時の私の状況は、「一九三〇年に、敵(蒋介石軍)の第一次圍剿という緊急事態の際、総前委が橋頭で紅二十軍の解散を命令した状況とだいたい同じである」と説明した(3)。つまり、彭徳懐は、そもそも毛沢東は袁文才を全く信用していなかったこと、自分が誤りを犯したとしても、その状況は一九三〇年の「富田急襲」から、一九三二年七月毛沢東が紅二十軍將兵数百名を反革命のAB団として全員皆殺したのと同じ状況なのだ、と言っているのである。いやそれよりは規模からすれば、罪は軽いのだと言外に主張しているのである(4)。自分を失脚させた毛沢東と林彪に、過去の事実を持ち出して反論しているのである。袁・王謀殺は、ただ自分が軽率にも特派員同志の話を鵜呑みにしてやったのではない。実は、毛沢東も彼らは信用の置けない連中だと言ったこと、この評価にも基づいているのだと主張しているのである。私は、この彭徳懐の弁明も、毛沢東にまだ気兼ねして、大胆に反論していかないものと感じられる。

一九三七年七月、延安を訪ねたエドガー・スノーに、毛沢東はこれまでの革命の歴史を語った。その中で「一九

二七年の冬、井冈山付近の土匪の首領であった王佐と袁文才という二人が紅軍に参加しました。これによって兵力は約三旅団に増大しました。王と袁は旅団長に任命され、私は軍司令でした。この二人は元匪賊でしたが、かつてその部隊を国民革命のために投入し、いまや反動と闘うために準備したのです。私が井冈山にいた間、彼らは忠実な共産主義者で、党の司令を実行しました。後に彼らだけが井冈山に残されると、匪賊の習慣に戻ってしまったのです。その後彼らは、当時すでに組織され、ソヴィエト化され、自身を防衛できるようになっていた農民たちによって殺されてしまいました」(『中国の紅い星』邦訳、頁一一六、岩波書店)と語っている。この話し振りでは、袁と王とは、匪賊に戻ってしまったから、革命人民によって殺されたのだとしている。当然のこと、仕方がないことと言う口ぶりである。六全大会の決定、永新県党委、党巡視員、彭徳懐軍の加担などに就いては、全く話していない。いや話たかもしれないが、エドガー・スノーが省略したのか、あるいは聞き逃したのかもしれない。毛沢東の意に反して、彭徳懐が袁・王二人を殺したと言う説は、まだ検討の余地がある。

筆者は、この二人の謀殺には、毛沢東と彭徳懐との間に、実は暗黙の了解があったのではないかと疑っている。井冈山革命根拠地の歴史からみて、毛沢東の許可なくこの二人を謀殺できたとは思えないからである。そのくらい袁文才と王佐は、井冈山革命根拠地の形成に重要な役割を果たしていたのである。

また、袁文才と王佐の謀殺は、毛沢東がやったと断定している論稿もある。香港から出版されている雑誌『争鳴』(二〇〇四年、第六期)の北海閑人「毛沢東思想之核心」(第四回)に「先ず最初に毛沢東の命令で殺害されたのは、井冈山根拠地の二人の創立者の王佐と袁文才の二人であった。毛沢東は一九二七年、湖南の秋収蜂起の残存部隊を率いて井冈山にのぼったが、これは事実上彼らのところに身を託したことを意味し、二人を拜して義兄弟になった。

毛沢東は山上で足場を築いて仲間が多くなると、この二人が地元の間人であり、民衆に対する基盤が自分より厚く、威信も自分より高く、部隊もよく彼らの命令を聞くので、二人を恐れるようになった。そこで、一九三〇年二月二四日、会議を招集すると偽って、二人を永新県の辺鄙な山の中に誘き出して捕まえ、目隠しをして首をはね、死体を鍾乳洞の中に放り込んで証拠を隠滅した」とある。これまで中国で出版された歴史書、論文、史料と全く異なる内容である。いかなる史料によってこのように書いたのか、不明である。

しかし、北海山人の一連の論稿はきわめて信憑性が高く、この部分も紹介する価値が大いにあると考えた。ところで『毛沢東年譜』（上巻）を見ると、二月二四日頃、毛沢東は永新県城から数十キロ離れた吉水県、吉安県一帯にいた。もし毛沢東の主導で謀殺が行われたとすれば、二・七会議あたりで謀殺の計画をしたのかもしれない。毛沢東が主催した二・七会議終了後、二週間足らずで袁・王は謀殺されているのであるから、毛沢東が全く関与していなかったとは考えられない。ところで、袁・王の謀殺に関係したといわれる永新県委書記の王懐、寧岡県委書記の劉超清は、共に「富田事変」でAB団とされ、後に肅清される運命をたどった。

注

(1) 『彭德懐自述』、人民出版社、一九八一年出版、一四二頁。これは彭德懐が、文化大革命で吊し上げられていた最中の一九七〇年に幽閉先で書いた反省文書を、一九七四年に彭德懐が死去した後、編集組織が整理し、一九八一年に出版したものである。

(2) 同上書、一四三頁。

(3) 同上書、一四四頁。

(4) 彭德懐は、蒋介石が進行してきた第一次開剿の一九三〇年に、毛沢東が橋頭で紅二十軍を解散させたのと同じ状況だと弁明するが、これは一九

三一年の間違ひではないか。紅二十軍の將校を虐殺して解散させたのは、一九三一年七月のことである。あるいは、毛沢東は、一九三〇年二月の富田事変の際、紅二十軍の解散を「橋頭」で宣告したのかもしれない。「橋頭」で解散させたとあるが、いまのところ史料で確認できない。どちらにしろ、自分がやったことは、毛沢東もやったことがあると弁明しているのである。

(3) 毛沢東が福建省で開催した南陽會議（一九三〇年六月）での言動

この會議は、紅第一方面軍總前委と閩西特委の聯席會議で、毛沢東が主催し、約六〇名が参加した。この會議は、毛沢東が提起した「流氓（ゴロツキ）問題」、「富農問題」の二つの宣言を可決した。「流氓問題」は、三〇種の良くない職業を具体的に指摘し、一番の土匪から始まって二番の盜賊、三番の娼妓、四番の兵隊ゴロツキ、五番の役者、六番の官署の職員、七番の博徒、八番の乞食、以上を主要八種とし、以下数は少ないながら九番の訴訟ゴロ（裁判沙汰にして強請りタカリをするゴロツキ）から二七番の和尚、二八番の道士、二九番の巫女、最後の三〇番の宗教信者までを流氓と規定したのである。そして、彼らを徹底的に党から排除し、彼らが「反革命勢力と結んで攻撃を加えてきた時には、豪も躊躇することなく消滅することが必要であり、その首領を消滅するばかりでなく、必要な時には彼らの一部あるいは全部を消滅しなければならない」とした(1)。

この決議で「流氓」とされた職種は三〇種と極めて多く、誰でも言いがかりをつけられれば、どれかにあてはまり、後の党内肅清を無限大にまで拡大する論拠となったと考えられる。

もう一つの「富農問題」の決議は、富農を三種に規定している。一つは、半地主的な富農で、手作り部分を持ち、余った部分を小作に出している農民。二つ目は、資本主義的な富農で、土地を小作に出さず、時には他人から土地

を借り日雇い労働者を雇って耕作している農民。三つ目は、初期の富農で、土地を小作に出さず、また他人から土地を借りず、農具を持ち自分だけで耕作し、余った穀物を売りに出したり、人に貸したりしている農民。これが毛沢東が主催して行った（恐らく毛沢東が起草した）決議文における「富農定義」である。そして富農は、「商業資本の方面では、いずれも地主の搾取よりも更に残酷である」、「貧農雇農の敵は、地主に止まらない。地主の搾取はもとより激しいが、富農の搾取は更に激しい」、富農は「公田は総て分配すべきではない、残しておくべきだ。山林と余った家屋は完全には分配しない」などと主張し、また左派が表面的に主張する「社会主義の共同生産」などと主張する。例えば、江西省の袁文才、福建省の傅柏翠などは、完全に富農路線の主張である（ここで毛沢東は袁文才を富農分子と規定している——小林）、だから「党内の富農分子を肅清することが必要である、なぜなら現在も地方組織には、とりわけ指導機関には富農分子が充満しているからである」などと徹底的に非難した⁽²⁾。以上を見ると、この時、毛沢東らは党内肅清の主張を富農層にまで拡大していることが分る。

注

(1) 「流氓問題」〔一九三〇年六月前委閩西特委聯席會議決議〕「中央革命根據地史料選編」中冊、五一—五二頁。

(2) 「富農問題」〔一九三〇年六月前委閩西特委聯席會議決議〕「中央革命根據地史料選編」下冊、三九八—四一四頁。

(4) 毛沢東と李文林等との対立激化（一九三〇年夏—十一月の黄陂肅反まで）

(イ) 江西省（贛）西南諸県におけるA B 団肅清

江西省革命根拠地におけるAB団肅清運動は、まず西南地区から始まり、九月に頂点に達した。党内反対派の肅清は、まず一九二九年にソ連のブハーリン派打倒の運動が、コミンテルンを通じて輸入されたことに始まる。コミンテルンは、中共に「改組派」に対する闘争を呼びかけ、中共中央はそれに答えて、一九二九年一月二三日、「江西省委員会に与える書簡」の中で、「贛西党の指導機関の中には、すでに富農、あるいは小地主の勢力が潜入している。その他、第三党分子の如きも党の指導機関に潜入している。これはきわめて重大な問題である」とした⁽¹⁾。しかし、実際に贛西南党がAB団を発見し、肅清を始めたのは、一九三〇年春からであり、それは九月に最高潮に達した。当時、AB団を捕殺する人数が最も多いのは、雩都県であった。

注

(1) 『中央蘇区史』(余伯流、凌歩機共著、九五二頁、二〇〇一年、江西人民出版社)。

(ロ) AB団肅清運動の高揚

六月二五日、中共贛南特委に所属する西路行委は、「改組派AB団宣伝大綱」を発表した。「もし、民衆の中に挙動不審の者が居れば、捕えてソヴィエトに引き渡し、訊問しなければならない。また、およそ見知らぬ者が赤色区域を通った時には厳しく検査し、もし怪しい場合にはソヴィエト政府に直ちに引き渡せ。赤色区域の民衆が往来する場合には、必ず所属するソヴィエト政府の通行手形を所持せよ。(中略)労働者、農民、人民にはただ階級の区分があるだけで、親族、朋友などの関係を顧みてはならない。およそ自分の家に来た者であれ、よそで見た者で

あれ、行動が正しくない者は、親族朋友であるなしかかわらず、ソヴィエト政府に通報して処置しなければならない。「現在、各級のソヴィエトは反革命肅清の工作を厳密に実行しなければならず、豪紳地主・反動富農分子は捕えて殺し、警戒を厳重にしなければならない。しかし、人を殺す場合には、反動である証拠がなければならず、誤って殺してはならない」と命じた(1)。こうして、赤色テロの実行を大いに煽った。

江西省西南部の雪都県では、「一九三〇年の五月から九月に至る僅かの中に、いわゆるAB団分子を千余人殺した。県城内の一区画だけでも二〇〇人近くをAB団として殺した。当時肅反運動の権限を握っていたのは、中共東河行動委員会秘書長兼中共雪都県委書記の黄維漢であった。彼は主観憶測にたよって総ての疑わしい人を捕え、拷問で自供を迫り、何でも聞いたことを信じ、軽率に人を殺した。(中略)その他の地域でも、六月・七月の間には興国、永豊、吉安の西区、安福の西南区などでもAB団の組織を摘発した。とりわけ、吉安のAB団は二千余人もあり、七〇〇人から八〇〇人もが自首して出てきた」(『中央蘇区史』頁九四五)という。

吉安県のAB団分子が二千人も居り、七百人から八百人が自首したというこの話は、「贛西南劉作撫同志(給中央的総合性)報告」(2)に出て来る。しかし、だからと言って、当時、これほどAB団がいたという証拠にするわけにはいかない。当時、地主富農、反共勢力、国民党関係者などが、AB団としてでたらめに殺される赤色テロが荒れ狂っていたので、心配した人びとが自らAB団として自首して殺害を免れたほうが得だとしたのであろう。

当時、贛西南特委は、一九三〇年九月一六日付の文書で、AB団肅清を大々的に呼びかけた。「革命的人民諸君、東路のAB団分子は大変多い。現在、AB団の工作を暴き、彼らを逮捕している最中である。しかし、あなた方は恐れる必要はない。われわれはただAB団の責任者を殺すだけである。彼らに騙され脅された貧苦の労働者・農民

は、前非を悔い改め革命闘争に積極的に参加しさえすれば、決して殺されることはないのだ」(3)。こう言われれば、反革命として逮捕殺害される心配のある人びとは、AB団に強制的に加入させられていました、といったほうが安全と言うことになろう。当時怪しいと思われる人には、拷問が普通に行われていたので、出鱈目な自供によって、いつなん時、誰がAB団として殺されるか分らなかつた。赤色テロによって生み出されたAB団という幽霊に、それを生み出した贛西南党幹部自身が怯え、ますますAB団肅清運動が拡大してゆく、そうした自動共振構造が生まれたのであつた。

一九三〇年九月二四日付で贛西南特委が発した「緊急通告、第二〇号、動員黨員群衆徹底肅清AB団」(4)は、AB団の「首領は、人民大会で人民自身によって斬殺させる」こととし、処刑する基準を示した。

A 富農小資産家階級のAB団とゴロツキのAB団は殺して赦さない。

B 労働者農民でAB団に加入し、歴史と地位があり、かなり活動的な者は殺して赦さない。

そして、「AB団は非常に陰険で狡猾で奸智にたけた強靱な連中なので、残酷に拷打しなければ決して白状しない。だから硬軟両方の方法をもって訊問することが必要である」とした。こうして、拷問自供だけで、現実に有りもしない架空のAB団とその組織・命令系統が幻想の中で生み出され、更にまたいっそう激しく肅清運動が拡大されていった。

こうした江西省の地方組織を中心として行われる肅反運動に対して、紅第一方面軍の書記毛沢東は、朱徳・彭徳懐・陳毅・林彪などと中央紅軍を率いて、南昌、長沙を長途攻撃したり、あるいは江西省から福建省にかけて絶えず行軍と戦闘を繰り返して廻っていた。だから、一九三〇年一〇月に、紅第一方面軍が江西省の在地部隊・

民衆と共に吉安城を攻撃占拠するまで、毛沢東は、江西省の地方組織に地主富農が沢山入り込んでいる、富農路線が敷かれているなどと李文林などが指導する江西地方党を批判していたが、しかし、江西省の党組織や在地農村でA B団肅清運動を激しく実施することはなかった。

八月五日、贛西南特委は李文林の主催の下に、第二回全体会議（二全会議）を開催した。上海に行き李立三路線の実行を命じられてきた李文林は、大会をリードし、毛沢東の「革命根拠地を強固にし、敵を誘い込んで、殲滅する」戦略に反対し、これは「保守観念であり、農民意識が濃厚だ」と批判し、「武漢に結集して軍馬に長江の水を飲まず」、「武漢を中心に湖南省、安徽省、江西省を奪取する」戦略を主張した。江西省黨員の中で多数派を形成した李文林は、毛沢東寄りだった書記劉士奇を罷免し、また背後を固めるために大規模なA B団肅清を展開した。しかし、毛沢東は、まず吉安城を攻略して基盤を固めることが必要だと主張し、また贛西南特委の主導によるこれまでの吉安城攻撃は何回も失敗していたので、両者は妥協、協力せざるを得ず、対立は一時凍結された。

注

- (1) 「反改組派A B団宣伝大綱」〔中央革命根拠地史料選編〕下冊、六三四～六三五頁。
- (2) 「中央革命根拠地史料選編」上冊、二二七頁、二四八頁。
- (3) 「為肅清A B団告革命群集書」、「中央革命根拠地史料選編」下冊、六三七頁。
- (4) 「中央革命根拠地史料選編」下冊、六四八～六四九頁。

(ハ) 吉安城の占領から撤退へ（一〇月四日～十一月一日）

一〇月四日、攻略した吉安城内において、江西省の革命家たちは、これまでの贛西南特委と共青团贛西南特委を合併して「江西省行動委員会」（二〇月一〇日の発足）に統一することを決定した。委員は一三人で、常務委員は李文林、曾山、陳正人、段良弼、叢允中の五人、書記は李文林、代理秘書長は李白芳、組織部長は叢允中、宣伝部長は陳正人であった。この委員会が統括するのは、四つの下部組織であり、下部組織の各書記は王懷（贛西行委）、劉超清（贛東行委）、郭承祿（贛南行委）、劉其凡（北路行委）の四人であった。以上九人の内、毛沢東に臣従した曾山と陳正人以外は、皆後にA B団の首領として富田事件以降殺害された。毛沢東は、この二全会議はA B団の会議であると考えた。

この時、江西省ソヴェト政府」の成立宣言も行われ、毛沢東、朱徳、彭徳懐、張国燾、方志敏などの最高幹部から李文林、王懷、金万邦、段良弼、曾炳俊、叢允中などの贛西南特委・江西省行動委員会の面々まで五三人が委員として名を連ねていた。これもまた後のことであるが、この五三人中分っているだけで一七人がA B団幹部として処刑されている。

さて、毛沢東らは、吉安を占領したものの、国民党の大軍が迫ったので長く持ちこたえることは不可能になり、軍事物資や軍資金の調達、国民党・土豪劣紳・反革命分子の処刑、新兵の募集等々と多忙を極め、軍政を敷く暇はなかった。それでは撤退後はどうするか。以後の戦略戦術をめぐって、一時凍結していた対立が、新しい論争を呼び起こし、意志の統一はできなかった。しかし、党中央からは南昌、九江に長駆せよという命令が来ていたので、やむなく毛沢東と朱徳は、主力軍に対し一〇月一三日に南昌に進撃せよと命令を出した。

注

(1) 紅軍の吉安城占領の過程、状況については、『吉水県志』（新編中国地方志叢書）に詳しい記述がある。

(二) 毛沢東の峡江会議（一九三〇年一月一七日）での言動

一月一七日、毛沢東は「峡江会議（紅第一方面軍総前委拡大会議）」を開催した。参加者は以下の各軍団代表などで約三〇人であった。

紅第一軍団……林彪、羅榮桓、黄公略、蔡会文

紅第二軍団……彭德懷、滕代遠、鄧萍、張純清、何長工、袁国平

長江局代表……周以栗

江西省行動委員会……李文林、曾三、陳正人

注、以上の出席者名は、『中央蘇区史』（頁二六七）による。

この会議でも、毛沢東は敵の情勢を見れば、南昌、九江を攻撃に行くべきではないと主張したが、李文林は「それは中央の方針に背くものであり、中国革命を断ち切ることになる」と強硬に反対した。結論は出ず、一応「南昌、九江に向かう」既定方針どおりということと終わったが、論争は続いた。

一月二三日以降、毛沢東は、「太平圩会議、羅坊会議（紅第一方面軍総前委拡大会議）」を連続して開催した。この会議の前に、蒋介石の一〇万の国民党軍がすでに江西省に迫っていることが、全軍に伝わった。それで、どこで防衛戦争を行うかが、避けられない当面の重大問題となった。

(ホ) 彭徳懐の一票で、毛沢東の戦略「敵を根拠地に誘い込む」に決定

毛沢東麾下の第三軍団には、政治部主任の袁国平を始め、毛沢東の戦略に反対する強硬論が根強かった。彼らは、紅一軍団は贛江（江西省の南部山岳地帯を源流として発し、江西省の中央を斜め北に貫いて流れる、江西省最大の川。江西省の主要な都市はみなこの川に沿って在る。この川は、いったん鄱陽湖に流れ込んでから九江市辺りで長江に流れ込む）の東側に布陣し、紅三軍団は贛江の西側に布陣し、贛江の両岸で国民党軍を迎撃すべしと主張した。江西省行動委員会の李文林たちも毛沢東に強硬に反対し、むしろ進撃して江西省の国民党占領地域である白区で決戦を挑むべきであり、敵を西南革命根拠地に誘い込んでならぬ。なぜなら、敵を誘い込んでソヴィエト区で戦えば、人民の持ち物の総てが破壊され、奪われ、失われて、ソヴィエト区の人民に大変な損害を与えるからである、と主張した。これに対して、毛沢東は、一〇万の大敵に対して、たった三万か四万の紅軍を贛江の両岸に二分することは不可能である。一つの拳にして戦うのだ。贛江の東には福建省にまで続くソヴィエト区があり、山脈と大平原と人民大衆の支援がある。贛江の東に紅軍を結集し、「敵を深く誘い込んで、敵の疲れを待って、これを殲滅する」戦略論を主張し、朱徳、周以栗、羅榮桓、曾山、陳正人などの賛成を得た。これ以上、李文林は紅軍主力を動かす力がなかったため、態度を明確にしなかった。一番反対が多かったのは、彭徳懐が率いる紅三軍団であった。

この当時の紅三軍団の情況について、前掲の「彭徳懐伝」①に依って見る。「一九三〇年九月下旬、中共中央は上海で拡大会議「三届三中全会」を開催し、中国革命に関する極左の方針を改め、全国総蜂起の準備を行い全国の

紅軍を總結集して中心都市を攻撃すると言う、これまでの冒険主義的政策を停止した。しかし、交通が不便でこの会議の精神と決議は、紅第一方面軍（書記、毛沢東）にはまだ届いていなかった。それで、中共中央長江局の軍事部門の責任者である周以栗が、紅第一方面軍司令部に着いた時、彼は中共中央の九月以前の長沙占領を命じる命令書を持参し、再び長沙を占領し、更に進んで南昌、九江を占領し、武漢を総攻撃する態勢を作れと命令した。この中央の指示は第一方面軍内に論争を引き起こした。九月二八日、第一方面軍総前敵委員会は、袁州で会議を開き、そこで毛沢東は次のように言った。もし軍閥混戦が終わろうとも、蒋介石は必ず兵力を結集して紅軍を攻めにくるだろう。だから、総前委のこれまでの主張にしたがって吉安を攻略し、農村根拠地を拡大しなければならない、と。しかし、少数の幹部は南昌を攻撃すべきだと主張した。（中略）しかし、会議は毛沢東の説得によって、先ず吉安を攻撃することに決定した。（中略）周以栗も納得したが、全員の本当の統一認識は得られなかった。彭徳懐は毛沢東の主張に同意した。

こうして、紅軍は吉安を攻略し、また新余、峡江、吉水などの県城も占領し、贛西南根拠地を一続きに結ぶことができ、形勢はきわめて良くなった。しかし、この時少数の幹部はまだ北進して南昌、九江を攻撃するよう強く主張した。それで、中共中央の命令に従うかどうか、この問題を最終的に解決することが急務になった。一〇月一七日、峡江で会議を開いたが、決着しなかった。（中略）

軍閥混戦に勝利した蒋介石は、すぐさま大軍を江西省に移動し、江西ソヴィエト区に襲いかかってきた。この情勢の急激な変化に対応し、紅第一方面軍総前委と江西省行動委員会は、一〇月下旬、羅坊において聯席会議を開いた。紅三軍団では彭徳懐、滕代遠、袁国平が出席した。会議がまさに対策を議論している時、江西省に侵攻した蔣

介石軍は、分宜、臨江の線まで迫り、紅軍を攻撃する態勢をとった。毛沢東は、こうした敵情を見て戦略の転換を行い、紅軍主力を革命根拠地に向かつて後退させ、敵を根拠地に誘い込み、その疲れを待って殲滅する“戦略を主張し、紅軍総てが贛江を東に渡る作戰計画を提起した。しかし、彭徳懐の率いる紅三軍団の幹部たちは同意せず、贛江を東に渡することに反対し、主戦場を峽江一帯に設定し、紅第一方面軍は贛江以東に、紅三軍団は贛江西に布陣するよう主張した。贛江を挟んで別れて布陣し、敵を迎え討つというのである。この二つの主張は互いに譲らず、論争はきわめて激しかった。

彭徳懐は、長沙から撤退した後、大都市攻撃はできないと深く感じたので、会議では毛沢東の戦略を支持したいと思った。この時、彭徳懐の率いる第三軍団に反対意見が多かったので、彭徳懐のもつ一票はきわめて重要であった。まさに彼が『自述』で述べているように、“私の一票は、この時かなり重要な役割を持っていた。どちらに入るかで、総てが決まるのだった”。彭徳懐の一票で、毛沢東の戦略戦術に最終決定した。

会議が終わると、彭徳懐と滕代遠は直ちに紅三軍団に帰り、幹部会を召集し、贛江を渡る準備を命じたが、一部の幹部は主張を変えず、またあるものは、兵を（中略）三分してゲリラ戦を行うべきだといい、極端な者は紅第一軍団と紅三軍団は分かれればよい、などと言った。

紅三軍団の幹部たちは、どうしてこのように贛江を東に渡る問題で強硬に反対を主張したのか。彭徳懐は、紅三軍団の中の五軍、八軍の將兵の多くは、湖南省の平江県、瀏陽県、湖北省の大冶県などの農民であり、郷土意識が強く、故郷から遠く離れて戦いたくないのだ、また贛江を東に渡ってしまったら、自分たちが湘江と贛江の間に打ち立てた革命根拠地を失ってしまうのを恐れているのだ、と考えた。そこで、彭徳懐は、彼らに今贛江を渡つ

て戦うほうが、最後は根拠地の拡大に有利である、また我われは全中国の解放を考えているのであって、故郷のこ
とだけを考えてはいけな、と説得した。以上、『彭徳懐伝』の引用。

注

(1) 『彭徳懐伝』、当代中国人物叢書之二冊、当代中国出版社、九一―九二頁、一九九四年。

第四章 毛沢東、紅軍内AB団約四五〇〇人を「黄陂肅反」で肅清

中央紅軍は、彭徳懐の賛成を取り付けて戦略的後退を決定し、全軍が贛江を東に渡り、革命根拠地の中心に敵
を引きつけて決戦を行うことになった。

『毛沢東年譜』(上巻、三二六頁、中共中央文献研究室編、一九九三年)に、当時の毛沢東の行動が次のように記
されている。

「一九三〇年一月中旬、毛沢東は朱徳と共に、紅第一方面軍約四万人を 指揮配置して戦略的後退を行い、永
豊県藤田と楽安県招携一帯に撤退した。また、同年十一月十八日、紅軍は吉安城を放棄した。十九日、毛沢東は総
前委秘書長の古柏、秘書の謝維俊とともに吉安から永豊県の藤田に移動し、紅軍主力に合流した。移動の途中、毛
沢東らは吉安県の戦闘準備が良くないこと、この地に駐留している紅二十軍の少数の幹部が、敵を深く誘い込む
作戦に懐疑的であることを知った。そこで、毛沢東は、この吉安県一帯を蔣介石の第一次大侵攻、第一次圍剿

に反撃する戦場にするのを中止した」と。

紅二十軍は、江西省行動委員会（書記、李文林）の指揮下にあり、富田、東固を中心にする江西人地方ゲリラが主体となって編成した軍隊である。この多くの指揮官は、これまで一貫して毛沢東の戦略に反対してきたが、この時期においても、まだ反抗的であったことが分る。そこで、毛沢東は、寧都県の黄陂、小布に防衛戦を張った。決戦を前に、吉安城を占領して以来、新しく獲得した約一万余人の中から、また従来の紅軍の中からも逃亡者や規律違反の兵士が続出した。毛沢東は、内外のかかる危機的な状況下において、まず紅軍内の大粛清を決意した。この突然の大粛清について、『中央蘇区史』は、次のようにまとめている。

「黄陂粛反」は、わずかに一〇日間ほど続いただけで、一二月初旬には基本的に終了した。そこで、紅軍の中から約四五〇〇人以上のAB団分子を摘発し、約二〇〇〇人を殺した。当時、紅第一方面軍の総数は、僅かに四万余人であった。つまり、紅第一方面軍四万余の将兵の一〇分の一がAB団分子とされたのである。僅かに七〇〇〇余人の紅四軍の中だけでも一三〇〇から一四〇〇人がAB団分子とされた。全軍団総数の五分の一を占める。その内の半分が殺された。「黄陂粛反」（軍隊内の第一次粛反）の後、紅第一方面軍は、一九三二年の二、三月に第二次粛反を実施し、AB団を討伐した。この第二次粛反でどのくらいのAB団が粛清されたか、確かな数字はない」（九六二頁）。

この紅軍内のAB団粛清は、これまで贛西南特委によって江西省西南ソヴェト区内で行われてきたAB団粛清のやり方をそっくり真似して行われた。残酷な拷問により「自白」させ、芋煮る式に怪しい兵士を捕え、嫌疑、逮捕、拷問、自白、処刑という順序で実行された。

当時、紅四軍第十二師師長であった蕭克は、次のように回想している。

「私の部隊が寧都に達した時、軍政治部は、お前たちの中にAB団分子がいると言って、具体的に何人かを指名した。その中に、師団政治部の宣伝隊長と宣伝員がいた。この二人は福建人で、閩西ソヴェト区の遊撃隊からきた者であった。これだけの話で、全くその他の材料はなかったのに、この二人を捕まえた。そして訊問したが、二人は認めなかった。それで拷問に続く拷問を行ったので、ついに二人は十数人の名前を自白した。この十数人を捕らえてまた拷問に続く拷問をやり、数十人の名前を自白させる。こうして十一月末から十二月初めまでに、十二師団だけで一〇〇人から二〇〇人を捕らえた。そしてその内の六〇人を殺した。その十数日後の、一二月上旬のある晩、師団の党政治委員と兵士代表は、更に六〇余人の一人を殺すと言った。その翌日の早朝、師長の蕭古は政治委員の羅榮桓に報告し、指示を仰いだ。羅は、「殺しすぎだ。労働者、農民出身者は、自首させこともできるのではないか」と言った。側にいた紅四軍軍委秘書長の黄益善も、「殺し過ぎだ」と言った。蕭古はそれを聴くと直ぐ走って帰った。しかし、「犯人」達はすでに刑場に集められていた。蕭古は「まだ殺すな。師団の党委が改めて検討して後に決定する」と。研討の結果、三〇余人は釈放したが、二〇余人は殺された。（『中央蘇区史』九六二―九六三頁）。

“黄陂肅反”は、紅軍總司令の朱徳の身边にまで及んだ。一二月下旬のある晩、肅反委員が朱徳の身边に仕えていた一五歳の少年をAB団として逮捕しにきた。朱徳の妻の康克清は怒り、朱徳に言って抗議してもらい、やっと釈放してもらった（『中央蘇区史』九六二頁）。

こうした、後に建国の元勳になったような党幹部、紅軍幹部さえも、当時、肅清の危険に迫られたという話は、陳毅、黄克誠などを始めとして、かなり沢山ある。圧倒的な武力を持つ国民党軍隊との天下分け目の一大決戦を目前にして、毛沢東は先ず最初に、自らが率いる紅軍を赤色恐怖（極左的テロリズム）の坩堝の中に投げ入れ、厳重な肅軍を行ったのである。

この「黄陂肅反」の中で、紅軍内のAB団の首領として逮捕された劉店岳、曾昭漢、劉超清、梁鼎元、江克寬、周赤などは、江西省行動委員会の中にAB団の総団があり、段良弼、李伯芳、謝漢昌が首領である、と自供した。この証言があったため、総前委は急遽富田に李韶九を送って彼らを逮捕しようとし、結果的に富田事変が勃発した。これが、総前委書記の毛沢東が党中央に送った「総前委答弁的一封信」（二月二〇日付け）なる書簡の中の弁明である。この時、毛沢東は、彼の戦略に真つ向から反対しつづけ最大の敵となった江西省行動委員会の書記李文林も逮捕したが、この件については内外に明らかにしなかった。李文林の他の同志たちは、三二年夏までに大部分が殺されたが、李文林だけは、三二年五月まで生かされた。

第五章 毛沢東はAB団の大量存在を本当に信じて

「AB団肅清」、「黄陂肅反」を行ったのか

毛沢東は一九三〇年一月四日に、党中央に宛てた書簡の中で、次のように言っている。

「近来、贛西南党（江西省西南部の党）は全般的に極めて重大な危機的状況に陥っている。全党が完全に富農路線によって指導されている。党と団（紅軍部隊）の二つの特委機関、贛西南ソヴェト政府、紅軍学校にAB団分子が現れている。各級の指導機関は、内外多数のAB団である富農に占拠されている。指導機関はもちろんと総てにわたって（中略）富農の指導を廃絶し、AB団を肅清しなければならぬ。贛西南党は、根本的な改造を加えなければ、決してこの危機を救うことはできない。今、総前委はまさにこの問題に取り組んでいる」（一）と。

毛沢東が、この書簡を書いた日付は、一〇月一四日である。この日は、紅第一軍団が吉安城を攻撃し攻略した日から一〇日後であり、また朱徳の部下が敵総司令部の重要史料を発見した日から一〇日後でもあった。その中にAB団関係の史料が有り、しかも李文林の父親の名前が発見されたというのである。それで、この時から李文林はAB団ではないかと総前委は疑い始めた⁽²⁾。しかも、先に述べた如く、この日は、当の李文林が中心になって、古くから江西省の革命に尽力してきた贛西南特委を改組して「江西省行動委員会」を樹立し、自分が江西省独自の権力機関を創設した日の直後でもあった。吉安占領の最初から、両者の対立が新しく始まったと言える。この一〇月四日に発見された李文林の父に関する史料は、今日の研究では、全くの同名異人であり、李文林の父はすでに二七年に死亡しており、しかも地主ではなく富裕中農であったことが明らかになっている⁽²⁾。

毛沢東は、江西省行動委員会とその指揮下にある紅二十軍が、本当にそんなにも沢山のAB団に占領された反革命の機関と本当に信じていたのか。これは、毛沢東自身に聞くより方法がない。しかし、こうしたことを毛沢東自身を書いたという史料は、いまだ紹介されていない。香港の中文大学の高華は、「答案是似信非信」、つまり「その

答えは信じられるようで信じられない」(3)という。私も、高華教授と同じく、毛沢東は敵のスパイや裏切り者は党内にいつもいるのだ。A B団がいらないと考えるよりも、いると考え、それに対処し、ある時はそれを弾圧し、ある時はそれを利用して局面の展開を図るのだ、と考えていただろうと思う。吉安占領の前にも、毛沢東は地主富農分子の存在とかその路線の貫徹などといったが、現実には、贛西南党委のようなA B団肅清はやらなかった。

毛沢東が、本格的なA B団弾圧を開始したのは、国民党の第一次囲剿が開始され、天下分け目の決戦を前にした一二月下旬であったが、どうして決戦を前にかくも残忍な肅軍が必要であったのか。それを知るためには、当時の紅軍兵士の実態を知らねばならない。

われわれ戦後の日本人は、中国共産党、工農紅軍に対して、次のようなイメージを持ってきた。彼らは、凶悪な世界ファシズムと戦い、帝国主義の侵略と戦い、植民地を廃絶し、搾取と抑圧なき共産主義という理想の世を実現せんという高貴な理想を持ち、鉄の意志を持って戦い抜いた輝かしき戦士たちの党、軍であると。それは中国史上始めて誕生した新しい人民の党であり、軍隊であると。こうした日本人左翼が戦後持ってきたイメージは、中華人民共和国建国後に海を隔てた日本の左翼、進歩陣営が作ってきた理想の社会主義に抱いた幻想のイメージである。

しかし、そうしたイメージは、今日、大幅な修正を加えなければならない。もしそうした理想の党、軍であったなら、毛沢東が紅軍全体の一割を肅清する「黄陂肅反」をする必要はなかった。では、井冈山以来、毛沢東と朱徳が率いてきた工農紅軍第四軍、紅第一方面軍、彭徳懐の率いる紅三軍、また江西省の地方紅軍などという共産党の軍隊の実態とは、如何なるものであったか。

一九二九年、楊克敏が党中央に送った「楊克敏の湘贛辺（湖南省・江西省の境一帯にある）ソヴィエト区の情況に関する総合報告」〔4〕。と陳毅が党中央に送った「朱徳・毛沢東軍の歴史及びその状況に関する報告」〔5〕。と
 いう二つの文書は、きわめて内情に関する重要な証言を行っている。

毛沢東軍と朱徳軍が井岡山で合流し、井岡山を根拠地にしてその周辺を遊撃して暮らしていたのは、一九二七年末から一九二八年三月までである。彼らは、四月から江西省の西南一帯に長駆出撃を行ったのであるが、その時の兵力は、全軍一万余人、内訳は朱徳部隊が二千余名、湖南から来ている農民軍八千余名、毛沢東部隊千余名、袁文才・王佐の部隊各三百余名であった。彼らの所持する銃は、僅かに二千挺にすぎなかった」（前掲「陳毅報告」）。「紅軍の生活と経済は、きわめて困難であり、数千人の人々を擁しているので、食事代は毎月少なくとも一万五千元が必要である。米も当地で準備するが、こうした経済の財源は、みな土豪から奪取して賄っている。井岡山付近の寧岡県、永新県、茶陵県、酃県、遂川県などの県の土豪は、すでにみなやつつけてしまった。さらに襲うとすると更に遠くに出かけなければならず、遠くに行くためには敵とがむしゃらに戦って始めて行くことができる。それで土豪を討ちに行くにも、大部隊が必要になるのである。紅軍の兵隊への給料支給は、財源がなく早くに廃止してしまった。ただ御飯を食べるだけで、銭が有る時には、二円ほどの小遣いをやるが、最近数ヶ月間は小遣いが無いのは勿論、草履代もなく、食費さえ減少してしまった。（中略）それで人びとは不安を感じて、当時、資本家を打倒して、毎日毎日カボチャを食う」などと叫ぶ者もいた。兵士を取り巻く状況を概観することができよう。こうして、兵士は動揺し、脱走する者、銃を持って逃げ出す者もあり、下級幹部も深刻に不安を感じている。（中略）
 経済問題は、紅軍の最も困難な問題であり、辺境に根拠地を維持できるかどうか、致命傷になっているということ

ができる」(6)。「紅軍第四軍が、二九年一月二三日に井岡山を離れて、江西省南部に出発したが、その原因も第一に経済問題の解決にあった」(7)。

二九年一月一四日に井岡山を離れた時、毛沢東・朱徳が率いる紅四軍団は、三六〇〇余名であった。彼らは、上猶、崇義、大余、信豊、定南、安遠、尋鄔、会昌、瑞金と転戦しながら急行軍で通過し、最後に李文林等がすでに強固に固めていた、江西省で最も強固の革命根拠地である吉安県富田に二月一七日にかろうじて到着した。後を追ってきた「彭徳懐の部隊が江西省南部に来て、三月初めに毛・朱の紅四軍と雩都県で合流した。この行軍を終えた直後の朱徳・毛沢東が率いる紅四軍の人数は二〇〇〇余人に激減しており、また彭徳懐の部隊も、僅かに八〇〇余人しかいなかった。両者合わせて銃は二〇〇〇余挺に過ぎなかった」(8)。井岡山を出発して、江西省の富田に着くまでの遠征は実に困難の連続であり、命からがら逃げ延びたというのが実情であった。たった二〇〇〇余人にまで兵力が減少していた毛沢東、朱徳たちは、やっとたどり着いた富田で数日間休養した。後に毛沢東によって「富田事変」を起こしたAB団の張本人として肅清される運命にある李文林、謝漢昌、曾炳俊、段起鳳、金万邦などが大歓迎した。ここでやっとのことで毛沢東たちは休養し、負傷兵の治療にあたることができた。この後、毛沢東、朱徳は、すでに井岡山が陥落したのを聞き、江西省西部から福建省に進出することになる。

この一九二九年四月、朱徳・毛沢東は党中央に書簡を送り、その中で「紅軍は多くが地元の間人ではない。地方の武装勢力である赤衛隊とは、全く異なっている。湖南省と江西省の境にある寧岡県などの農民は、赤衛隊に入つて兵隊になるのは願うが、紅軍に入るのを願わない。だから、我々は何人かの農民兵士すらずつと見つけられないでいる」(9)。と書いている。こうした極めて困難な状態が一九二九年いっぱい続いた。毛沢東、朱徳、彭徳懐の

軍隊全部合わせても数千を越えることはなかった。このような状況の中で、朱徳は毛沢東の独裁的なやり方に反感を持ち、二六年六月から一二月まで両者はしばらく対立し、離間状態が続いたが、最後は朱徳が屈服した。

毛沢東・朱徳の中央紅軍が、にわか作りの農民兵を集めて一万以上の兵力を擁するに至ったのは、一九三〇年に入ってから江西省南部と福建省西部を一続きの革命根拠地に作り、国民党軍や地方軍閥の大軍としばしば戦えるようになってからである。三〇年八月、紅軍は総力をあげて長沙攻撃をしたが失敗した。しかし、撤退する途中、追撃してきた湖南国民党の何鍵の大軍を殲滅した。紅軍は紅第一軍団成立以来の大勝利を収めた。そして「この勝利に乗じて民衆を大いに立ち上がらせて、紅軍を拡大し、一万人の兵力を一万八千人にまで拡大したのである」⁽¹⁰⁾。この勢いに乗って、八月二三日、約二万の朱毛軍と約一万の彭徳懐軍が合流合体して、「中国工農紅軍第一方面軍」を結成した。強大になったこの新しい第一方面軍は、同年一〇月四日の夜、吉安城を攻略、占領した。そしてここでもまた、一万以上の民衆を紅軍新兵として補充した。恐らく、江西省南部の重鎮である吉安城を攻略したため、紅軍は一挙に民衆から英雄視され、共青团員、赤衛隊、その他の共産党系の予備兵力の農民が、こぞって紅軍に押しかけ入隊したのであろう。中央紅軍は一年足らずの間に、三千余人から四万余人に急増したのである。

その補充された新兵の大部分は、学歴が無いのは勿論、文字さえ読めず、ましてやマルクスもレーニンも共産主義理論の何たるかも全く知らない貧農、雇農の青年たちだったことは間違いない。当時、土地革命戦争の中で、地主富農出身者や知識人はAB団分子としていたるところで肅清、打倒されていたので、貧しい無学文盲の青年しか紅軍に入る者はいなかった。吉安城陥落の際には、ここに逃げ込んでいた「土豪劣紳、地主、大金持ち、国民党関係者、反革命勢力関係者」などが、恐らく百人単位で処刑されたと思われるので、そうしたことに快哉を叫び、

暴力行為を英雄視する貧しい人々しか紅軍に入らなかった。資産の有るもの、学歴のあるものは、恐怖に怯えて紅軍から逃げた。

これは私の想像であるが、毛沢東はこうした水脹れした紅軍の中に、国民党の特務機関が大量に潜入しており、それを摘発し一掃することが党の当面の最大の課題であるなどと、決して思わなかったであろうと思う。

一九二七年から三〇年初めにかけての、あの困難な戦いの日々に、共産主義の学問を学び、革命のために生涯をかける人間など、実は同志の中に百人いるかないか、あのいつも醒めた目で人の世を見てきた冷徹な毛沢東は、そう思っていたであろうと、私は想像する。「たった二、三ヶ月の間になだれ込んできた紅軍兵士などどれほど信頼できるのか。しかも、敵は全国の軍閥混戦を制覇した蒋介石の近代的な軍隊十方であり、それはもう目前に迫っているのだ。紅軍内の古参幹部の間にも、自分の戦略戦術に猛反対する李文林ら江西省行動委員会の面々がいる。彼らが指導、指揮している約二千から三千の兵力を擁する紅二十軍がいる。しかも、彭徳懐の第三軍にも自分に猛反対した古参幹部や一般兵士が居り、彭徳懐の説得でやつのことで革命根拠地内に「敵を深く誘い込み、その疲れを待って、殲滅する」戦略戦術が支持されたのだ。この伸るか反るかかの決戦を目前にして、どうしてAB団の摘発などに没頭しておれようか。むしろAB団の一掃に名を借りて、反対派を一掃し、水脹れの軍隊の贅肉を削ぎ落とし、徹底的な肅軍をしなければ、国民党の大軍と決戦などできないことは明白である。AB団討伐の名を借りて、この二つの課題を実現するのだ」。毛沢東に代わって彼の心境を計れば、こういうことになろう。

我われ戦後の進歩派日本人は、「紅軍兵士」、「共産黨員」などと言えば、崇高な共産主義の理想を持ち、革命に自己の生死をかける犠牲的精神を持った戦士たちというイメージを持つてきた。そして彼らを支援し、彼らを生み

出す革命的人民を想像する。そして、私も含めて多くの日本人は一九七〇年代くらいまで、毛沢東と中共、中国革命を大いに賛美してきた。しかし、我われ日本人が、頭の中で想像し、理想化した世界革命を目指す革命的戦士、革命的人民などは極めて少なかったのである。そんな人は、当時、中央革命根拠地に数百人いるかどうかさえ疑わしかった。国民党との階級決戦を叫ぶ、毛沢東の四万余の紅軍兵士の大半は、一年以内に加入した人びとであり、おそらく大部分は文字、文書さえ十分に読めず、ましてや、マルクスの『共産党宣言』さえ読んだことがなかったであろう。

国民党との一大決戦をするのに、紅軍四万余の一割前後を一気に肅清して殺し、軍内を徹底的に引き締め、研ぎ澄まされた戦闘集団に铸なおすことが絶対に必要である。毛沢東の冷徹な眼力は、紅軍兵士の負の側面を見逃さなかった、と言うべきであろう。しかし、ここにおいて、毛沢東の愛したのは、個々の貧しい農民の戦士ではなく、革命の主体となつて戦うはずの「貧農、雇農階級」という階級概念であったことが、明白になった。この階級範疇に属さない者は、削ぎ落さねばならないのである。

次にもう一つの問題、毛沢東は党内反対派、つまり江西省革命陣営の主流派である李文林派に対してどう対処したかという問題に移ろう。彼らに対して、毛沢東は次のように考えたに違いない。

李文林を書記とする江西省行動委員会と、その傘下にある紅二十軍は、富田と東固を根拠地とし、駐屯地としている。これが江西省の共産党の最強の防御陣地であるが、この一帯に「敵を誘い込んで、殲滅する」ことに、李文林派と紅二十軍の将兵は反対している。彼らは自分たちの故郷が血の海になり、革命の資産が無に帰すことを恐れ、革命の大儀を忘れ、紅第一方面軍総前委の決定にあくまで敵対的である(11)。しかし、紅二十軍などは、兵士

の数はせいぜい三千有るか無きか、しかも地方ゲリラ戦しか戦ったことがない。吉安城の攻略も我われ紅第一方面軍の勢力があつてこそ成功したのだ。彼らは「南昌、九江、武漢へ進撃せよ」などと勇ましいことを言ってきたが、自分たちだけでは全く実行する戦力はない。彼らは、党内でまた農村で多くの人がびとを「反革命分子」「AB団」として処刑したが、実は富農階級に甘く、土地革命を真剣に実行してこなかった。もし彼らが、裏切つたなら、国民党の総攻撃に堪えられない。我われ全革命勢力が消滅するのだ。彼らこそじつは本当のAB団反革命分子と見なすべきである。この決戦を前にして、吉安城内で朱徳の部下が「李文林の父は地主でAB団である」という確かな証拠を見つけたという。実は子の李文林もAB団であろう。直ちに、李文林一派を逮捕し、彼らこそが反革命のAB団であることを白状させ、次に富田を急襲して一挙に彼ら全体を殲滅し、また紅二十軍の反対派将校を一掃すると、如何なる手段をとつても彼らの正体を暴き出し、ことを一気に決すべきだ、と。

毛沢東は、こうした決意を、恐らく八月の「二全会議」（李文林等の反毛沢東会議）以来胸に抱き、一〇月の吉安城占領（李文林等の江西省行動委員会の結成と毛沢東戦略への反対）以後決心したものと思われる。毛沢東は、肅反委员会主任の李韶九に、次のように命令したものと想像する。「江西省行動委員会の書記李文林がAB団であることは証拠により明白になった。如何なる手段をとつても彼らAB団全員を暴き出して肅清せよ。今捕えたAB団分子が白状した仲間は皆名簿に記載してある。彼らを抑えて、決して赦してはならない。もう戦争は始まつているのだ、ぐずぐずするわけにはいかない。ことは一刻を争うのだ。誤審、誤判を恐れてはならない。手段の如何を問わない。断固として一気に決せよ。かれら反革命の裏切り者を殲滅しなければ、国民党との決戦に勝利できない。君の果敢な処置に党と紅軍の全運命がかかっているのだ」と。

「如何なる手段をとつても、A B 団を総て暴き出し、断固として一掃せよ」と言えば、「いかなる残忍な拷問も問わない、いかなる恩情も躊躇もゆるされぬ、直ちに殲滅せよ」と言う意味になる。恐らく毛沢東は、これ以前に古柏、曾山、陳正人、李韶九の四人と細かい計画を練つたものと思う。誰をA B 団分子として逮捕処刑するか、どの部隊を派遣して実行させるか、誰に指揮をとらせるか等々。

毛沢東は、過去において贛西南特委、江西省行動委員会、紅二十軍の将兵と行動を共にし、彼等と面識があり、その事情に詳しい李韶九を選び、派遣することにした。李は湖南人で北伐戦争、南昌蜂起に参加し、早くから毛沢東に支援され、江西省に入り李文林、王懐、曾炳俊など江西人と共にゲリラ戦を戦つた経歴があり、顔を見まぢがう心配はなかつた。当時、二七歳ほどの年齢で、毛沢東直属の肅反委員会の最高責任者でもあつた。李韶九をよく知っている蕭古などによれば、李韶九は「阿諛追従が上手く、品性きわめて下劣な人間であつた」という。この李でなければ、実行段階で大失敗する恐れがあつた。

さて、毛沢東は段取りを次のように決定した。紅軍全体の内部肅反、つまり肅軍を一一月下旬から一二月上旬の一〇日間ほどで一気に完了し、その過程で李文林とその仲間を逮捕し自供させ、続いて富田に李韶九を派遣し、江西省の反対派を一掃すると。A B 団の搜索と排除が目的ではない、国民党の大軍と天下分け目の「階級決戦」をするために、断固として反対派を一掃し、肅軍によって、紅軍の規律と覚悟を固めること、これこそが毛沢東の目的であつた。これまで江西省の革命家が始めていた「A B 団肅清運動」は、今度はそれを逆手にとって彼らを撃滅する恰好の口実になると。

私は、多くの資料、研究論文、概説書などを読み、「黄陂肅反」と李韶九の「富田急襲」は、一九三〇年のこの

こうな状況下で、毛沢東によって上記のように計画され、一気呵成に奇襲攻撃として実行されたものであると分析する。

毛沢東の建国後の政治運動のやり口をみても、例えば、騙まし討ちで始めた反右派闘争の開始、突如命じた人民公社の発足、鳴り物入りで始めた大躍進の号令、彭徳懷・張聞天・黄克誠などを一挙に打倒した廬山会議での政変、更に奇想天外な文化大革命の発動、劉少奇打倒、その他多くの政治運動をみても、人民代表大会にかけず、党中央の政治局会議にもかけず、さらに党首脳にさえも相談せず、突如として奇襲戦法で実行した。こうした毛沢東の「書記独裁」の性格は、すでに早くも一九二九年の約半年にわたる朱徳との論争を巻き起こした。毛沢東の最終的勝利に終わったこの「書記独裁」事件以来、大いに憂慮されてきた。毛沢東の独裁は、まず「黄陂肅反」、「富田急襲」に、その原形と嚆矢をみるとすべきであろう。

また、彼の政敵に対しては、絶滅するまで攻撃をやめない性格、悪く言えば「無慈悲」な、よくいえば「冷徹果断」な性格の問題である。廬山会議の時などで、党首脳部の中の一部の人々は、毛沢東をスターリンや朱元璋に似ていると陰で言いながら恐れたと言うが、そうした「勇猛且つ冷酷」な性格は、一九三〇年のこの党内、紅軍内の肅清事件で早くも確認することができる。この時、AB団肅清の形態をとって党内反対派と軍内反対派を、一挙に、無慈悲に、且つ徹底的に粉砕しようとしたのだと、結論づけることができよう。

注

(1) 『毛沢東年譜』上巻、中共中央文献研究室編、一九九三年、三一九頁。

- (2) 「中央蘇区史」 九六五頁。
- (3) 「紅太陽是怎样昇起的」(高華著、中文大学出版社、二〇〇〇年、一六頁)。
- (4) 楊克敏綜合報告、一九二九年二月二五日付文書。「中共革命根拠地史資料選編」上冊、一二〇―一五三頁。
- (5) 陳毅報告、一九二九年九月一日付文書。「中共革命根拠地史資料選編」中冊、四四四―四六三頁。
- (6) 注4の「楊克敏綜合報告」、上冊、三六〇―三七頁。
- (7) 注5の「陳毅報告」。
- (8) 注5の「陳毅報告」、中冊、四四九頁。
- (9) 「中央蘇区史」 九〇頁、「中共中央文獻選集」 六七四―六七五頁。
- (10) 「中央蘇区史」 二二四頁。
- (11) 「毛沢東年譜」 上巻、三二六頁。

第六章 毛沢東の戦争哲学 ——「赤色恐怖」論、「行き過ぎ」論について——

毛沢東の革命戦争哲学は、「中国社会各階級の分析」(一九二六年二月一日、『中国農民』第二期掲載)、「湖南農民運動視察報告」(一九二七年二月一八日、『長沙報告』掲載)などの初期の著述の中に、基本的な骨格は示されており、文化大革命に至るまで基本的には変化がなかったと思われる。毛沢東はこれらの文書の中で次のように言う。

「誰がわれわれの敵であるか? 誰がわれわれの友であるか? 友と敵の見分けがつかないようでは、それこそ革命分子ではない」とし、各階級それぞれの階級的立場を分析し、更に各階級の中の各階層を区別し分析して、プロ

レタリアートと貧農を眞の革命勢力と規定し、それからの距離をもって革命の敵なのか、中間派なのか、同盟軍なのかというように位置づけける。毛沢東の分析によれば、革命の主力軍である工業プロレタリアートは、当時たったの二百万しかないとするれば、湖南や江西の農村では、革命の主力軍は貧農階層・農業プロレタリアート階層だけであり、彼らだけが「勇敢に戦う」存在ということになる。自小作農は革命に「参加する」、半益農・手工業労働者・店員は「積極的に参加する」、という位置関係に置かれる。財産の多寡、搾取関係の有無、生活の貧富、この三種類の基準で人間を誰が敵であるか、誰が友であるかが確定される。

また、革命運動に関しては、旧来の秩序を「ムチャクチャ」にし、闘争が「行過ぎ」て、一時的に「赤色恐怖」の現象が現出されなければならない、とする。毛沢東が行った一九三〇年の「AB団肅清・紅軍肅清」のやり方を理解するには、『湖南農民運動視察報告』の中の、次の部分が特に参考になる。

「すべての『いきすぎ』の行動も、第二の時期には、皆革命的意義をもっている。率直に言えば、どの農村でも、短期間の恐怖現象をつくりださなければならない。そうしなければ、けっして、農村の反革命分子の活動を弾圧することはできないし、紳士階級の権力をうちたおすこともできない。誤りを正すには、度をこさねばならない。度をこさなければ、誤りは正せないのである」。

この部分を、三〇年十一月、蔣介石の国民党軍との決戦を目前にした毛沢東は、次のように適応したのである。

「すべての『いきすぎ』の行動も、階級決戦の時期には、皆革命的意味を帯びてくる。率直に言えば、どの局面でも、短期間の恐怖現象を作り出さなければならない。そうしなければ、けっして、紅軍内の反革命分子の活動を

弾圧することはできないし、江西省の行動委員会に巣くうAB団反対派とその指揮下にある紅二十軍の権力をうちたおすこともできない。誤りを正すには、度をこさねばならない。度をこさねば誤りは正せないのである」と。

こうして先に見たような、一瞬の内に紅軍内で約四五〇〇名を肅清し、同時に、李韶九に肅清の全権を与えて富田に派遣し、反対派と紅二十軍幹部を急襲させた。こうして、決戦を前に一時的に自陣営にたいして「赤色恐怖現象」の洗礼を浴びせかけ、かれらに革命戦争の無慈悲さ、革命戦争の壮絶さを教え、階級決戦の覚悟を強いたのである。これが、毛沢東が行った「黄陂肅反」、「富田急襲」の真の意味であった。

第七章 終章 「始作俑者」の歴史の隠蔽と革命の神話化

毛沢東の「黄陂肅反」と「富田急襲」は、王明（モスクワ留学生、一九三二年一月、党の実権を握り、都市での勝利、反富農路線を強化して、毛沢東のAB団肅清を認可し、以後の全革命根拠地に於ける党内大肅清の道を開いた）の極左路線の公認を得た。以後、この公認は、各革命根拠地に拡大する大規模な肅清運動に発展していった。こうして、中共は総ての革命根拠地の多くの同志に対してAB団、改組派、第三党、社会民主党、トロツキスト解党派等々のレッテルを貼り、党員、兵士、民衆を多数殺害し続けた。その犠牲者数は一九三〇年から一九三四年までのたった五年間に、すでに記したように一〇万人にも上るのである。毛沢東は、かかる意味において肅清の歴史の歯車を始めて回した者、つまり「始めて俑を作りし者」（孔子の言葉、「始作俑者、其無後乎」と言うべきである）であろう。

毛沢東は、国民党の第一次「围剿」に「敵を深く誘い込み、その疲れを待つて殲滅する」戦略と「敵進我退、敵駐我擾、敵疲我打、敵退我追、遊激戦裏操勝算。大步進退、誘敵深入、集中兵力、各個撃破、運動戦中殲敵人」という有名なゲリラ戦術を定式化して戦い、大勝利を得た。

しかし、一方、李韶九に全権与えて実行した「富田急襲」は失敗し、処刑、拷問で怒り狂った劉敵、王懐、叢允中、段良弼、謝漢昌、曾炳俊、李伯芳、金万邦たちは、千を越える紅二十軍将兵を連れて、「反毛沢東」の宣言をして、紅第一方面軍から脱出し、贛江を西に越えて独自の闘争を展開した。これが毛沢東に反乱をおこした紅軍内の反乱「富田事変」である。「富田事変」は、後に毛沢東の個人崇拜を打ち立て彼を神聖化し、中国共産党のソヴィエト時代の歴史を革命伝説にしたてる際の、最大の汚点になった。この汚点を消すために、「富田事変」全体が歴史のタブーとして消し去られていったのである。毛沢東の死後、戴向青などの努力、冤罪を晴らさんとする遺族の執念、自らの歴史の誤りを正そうとする蕭古將軍、黄克誠將軍などの反省などが重なって、しかも開明的総書記の胡耀邦の最終的決断によって、かなりの人びとの冤罪が晴らされた。犠牲者は、反革命分子から烈士と見され、名誉は回復されつつある。しかし、まだ大粛清の真相は充分に明らかになったとは言いがたい。例えば、関係資料の全面公開は為されておらず、誰が何処で誰によっていかなる罪で、またいかなる方法で殺害されたのか全くわからない。革命神話の解体未だ成らずである。

最後に蛇足ながら、一言。これまで見てきた中共の歴史の一こまは、ロシア革命の成功、スターリン主義の勝利、世界資本主義のファシズム化、世界大恐慌の勃発、日本帝国主義の侵略強化、満州の完全植民地化、国民党の墮落と暴虐、こうした内外の矛盾を、江西省の山岳ゲリラが、貧しくて狭い農村革命根拠地の中で、それら総体を引

き受けんとして戦った、偉大にして悲劇的な闘争の結末であった。本稿は、それを江西省の革命根拠地における革命主体内部の矛盾の発展過程として考察しただけであり、改めてロシア革命以降の世界史的矛盾の発現として考察する必要がある。今後の課題である。

付記、本稿に関係する日本で発表された論文、著書には以下のようなものがある。中国にも多数あるが、省略。これらはほとんど読み、成果は本論文に取り入れてある。しかし、中国のものはかなり部分的には詳しいが言論の自由は制限されており、ことの本質に触れていないものが多いと言わざるを得ない。

福本勝清「中国革命への挽歌」(壘紀書房、一九九二)

同上「中国共産党外伝」(蒼蒼社、一九九四)

小林一美「一九三〇年代初期、中国共産党の内部粛清の実態」(神奈川大学人文学会「人文研究」一三五、一九九九)

同上「中共、中央革命根拠地における客家と土地革命戦争」(神奈川大学人文学会「人文研究」一五五、二〇〇五年三月)

同上「中共の土地革命戦争、地主富農打倒から反革命粛清へ」(歴史学会「史潮」新五七号、二〇〇五年五月)

小島晋治「ユートピアから逆ユートピアへ―中国の場合」(ユートピアへの想像力と運動)御茶の水書房、二〇〇一年、所収